

上文説けるが如く、價値の絶對なるもの、是れを美的と爲し、美的價値の最も醇粹なるもの、是れを本能の満足と爲す。然れども本能以外の事物と雖も、其の價値の絶對と認めらるゝものは亦美的たるを妨げず。是に於てか美的生活の範圍も亦隨ふて本能の満足以外に擴充せらるゝことを得。

例へば、道德は相對の價値を有するを以て本來の性質と爲す。然れども若し人ありて道德其物に絶對の價値ありと爲し、其の奉行を以て人生究竟の目的なりとなさば、是れ既に道德的に非ずして、美的也。是の如き人の態度は、實際的に非ずして翫賞的也。古の忠臣義士、孝子烈婦の遺したる幾多の美談は、道德の名によりて傳はれりと雖も、實は一種の美的行爲のみ。彼等の其の道に就くや、鳥の塙に歸るが如かりしのみ。其の心事や渾然たり、豈其の間に目的と手段とあらむや。

眞理其物の考察を以て無上の楽しみとなし、何が故に眞理を考察するかてふ本來の目的を遺却するものも亦知識的生活を超越して美的生活の範圍に入れるもの也。眞正なる學者の眼より見れば、是の如き人は其の爲すべきことを忘れたる一學究に過ぎざらむのみ。然れども

彼は眞正なる學者の享受し難き満足を其の學術より獲得し得る也。

世に守錢奴と稱するものあり、彼は金錢を貯ふるを以て人生の至樂となす。是れ明に金錢本來の性質を遺却し、手段を以て目的と誤認したるものなるを以て、道德上の痴人たるを免れざるべし。而も金錢其物を以て人生の目的と信じたる彼は、學術其物を以て人生の目的と認めたる學者の如く、既に美的生活中の人たる也。守錢奴は決して吾人の好む所に非ずと雖も、守錢奴自らにとりては、金錢は彼れの安心也、至福也。吾人は彼れの心事を憐れむと同時に、深く名教の外に得たる彼れの樂地を嫉まずむばあらず。

戀愛は美的生活の最も美はしきものの一乎。是の憂患に充てる人生に於て、相愛し相慕へる年少男女が、薔薇花かをる籬の蔭、月の光あかき磯のほとりに、手を携へて互に戀情を語り合ふ時、其の楽しみや如何ならむ。彼等の爲す所を以て痴態と笑ふ勿れ。かゝる痴態は眞に人を羨殺するに足るものならずや。一旦世事の如くならず、思ひしことは泡の如く消えて、運命、鐵の如く彼等の間を斷たむとする時、百年の命を以て一日の情に殉し、相擁して莞爾として死に就くが如きは、人生何物の至樂か能く是れに類ふべき。道學先生の見地よりすれ



ば、戀愛の如きは青春の迷ひに過ぎざらむ、然れども是の如き迷ひは醒めたるものにとりては永遠の悔恨に非ざるべき乎。

昔者、印度に瑜伽と稱する苦行の學徒ありき。彼等の爲すところは實に今の人を戰慄せしむるに足るものなりき。而も是の如き苦行は彼等にとりて即ち解脱の道也、無上の淨樂也。彼等は是の無上の道に就かむが爲に、其の一指を擧げて輒ち捉へ得べかりしものろくの人生の逸樂を斥けて悔ゆる所無かりし也。近くはトラピストの例に見よ。彼等は無言の行者也。一切の聲色を斷絶して一神の向仰に專念す。世榮に競奔するものより見れば抑、何等の呆癡ぞや。然れども誰か知らむ、彼等の生活には實に王者を艶羨せしめ得べきものある也。彼等は是の平和と安心と怡樂とを果して何處より得來りたる、富貴名利の外に人生の樂地を求め得たる彼等は幸ひなる哉。

詩人美術家が甘んじて其好む所に殉したるの事例は讀者の既に熟知する所ならむ。畢竟藝術は彼等の生命也、理想也。是れが爲に生死するは詩人たり美術家たる彼等の天職也。是の天職を全うせむが爲に、彼等の或者は食を路傍に乞へり、或者は其の故郷を追放せられたり、

或者は帝王の怒に觸れて市に腰斬せられたり。あゝ死を以ても脅かすべからざる彼等の安心は貴き哉。富貴前にあり、名利後にあり、其の意に反して一足を投ぜむ乎、是れ盡く彼等の物のみ。而も彼等は斯くして得たる生に較ぶれば、死の遙に幸ひなることを認めし也。請ひ問はむ、世の富貴に誇り、權威に傲るもの幾人が能く這般の消息を悟了せる。

是の如きは美的生活の二三の事例也。金錢のみ人を富ますものに非ず、權勢のみ人を貴くするものに非ず、爾の胸に王國を認むるものにして初めて與に美的生活を語るべけむ。

### 七 時弊及び結論

吾人の言甚だ過ぎたるものあるが如し。然れども讀者よ、時弊に憤る者の言はおのづから是の如くならざるを得ざる也。

何をか時弊と云ふ、吾人は是れを數ふるの煩はしきに堪へざる也。夫の道學先生の説く所を聞かずや、何ぞ其の物々として缺々たる。彼等は人の作りたるものを以て天の造りたるものを律せむとするものに非ずや。處に隨ふて變易すべき道德に附與するに萬能の威權を以てせ



むとするものに非ずや。彼等且暮に叫んで曰く、爾の義務を盡し爾の權利を全うせよと。彼等の所謂義務とは、借りたるものを返すの謂に非ずや。彼等の所謂權利とは、貸したるものを收むるの謂に非ずや。然れども人生の歸趣は貸借の外に超脱するを如何せむ。又夫の學究先生の訓ふる所を聞かずや、何ぞ其の迂遠にして吾等の生活と相關せざることの甚しき。知識は吾人の歎するところ、然れども知識其物に幾何の價值がある。宇宙は畢竟疑問の積聚也、人は是の疑問の解決を待つて初めて安んじ得べくむば、吾人寧ろ生なきを幸ひとせむ。野の鳥を見よ、勞かず、紡がざれども尙ほ好く舞ひ好く歌ふに非ずや。

道德と知識とは人類の特有に係ると雖も、畢竟吾人が本能の満足に對して必須の方便たるに過ぎざること既に説けるが如し。然れども是の如き煩瑣なる方便を待つて初めて得らるべき幸福は、吾人にとりて甚だ高價なるものに非ずや。人の虚榮を好むや、禽獸の卑しむべきを知りて其の羨むべきを悟らず。漫りに道義を衒ひ知識を誇るも、人生の歸趣に至りては茫然として思ふところなし。五十年の短き生涯は、是の如くにして匆忙の間に勞し去らるるを見ては、吾人豈惆悵たらざるを得むや。蓋し今の世にありて人生本來の幸福を求めむには、

吾人の道德と知識とは餘りに煩瑣にして又餘りに迂遠なるに過ぐ。夫の道學先生の如き、若し眞に世道人心の爲に計らむと欲せば、須らく率先して今日の態度を一變せざるべからず。嗚呼、憫れむべきは餓えたる人に非ずして、麵包の外に糧なき人のみ。人性本然の要求の満足せられたるところ、其處には、乞食の生活にも帝王の羨むべき樂地ありて存する也。悲しむべきは貧しき人に非ずして、富貴の外に價值を解せざる人のみ。吾人は戀愛を解せずして死する人の生命に多くの價值あるを信する能はざる也。傷むべきは生命を思はずして糧を思ひ、身體を憂へずして衣を憂ふる人のみ。彼は生まれて其の爲すべきことを知らざる也。今や世事日に匆劇を加へて人は沈思に遑無し、然れども貧しき者よ、憂ふる勿れ。望みを失へるものよ、悲しむ勿れ。王國は常に爾の胸に在り、而して爾をして是の福音を解せしむるものは、美的生活是れ也。

(明治三十四年八月)



## 靜 思 錄

### 一 自分はイゴイストだ

靜に思ふと云つたところで、別に何を思ふでも無い、皆んな自分の事を思ふに過ぎないのだ。自分はこの世の中で自分の外に何物をも思はない、否、思はうとしても思ひ得ぬのである。自分は大方世人の所謂イゴイストと稱する者であらう。

イゴイスト！、人によりては此の名前ばかりで既に多くの罪惡を預想するであらう。剛情、我慢、私利、私慾、不人情、沒道義、——斯んな種類のあらゆる惡德は此の名稱に關聯して直ちに想ひ起さるゝであらう。『彼はイゴイストだ』これだけの言葉は一個の人を道義の區域以外に放逐し得る力がある。あゝ、何事があるにしても、自分は實際そのイゴイストに相違ないのだ。

自分だからとて何でくすき好むで斯様なものになりたくは無い、萬々なりたくはないが

所詮致しかたが無いのだ。實際自分は自分の事の外は何物をも思ひ得ぬ境遇にあるのだ。若し自分の事をのみ思ふのがイゴイストならば、自分は其イゴイストと呼ばれて少しも異存は無い、——人は己れ自らの外には何物でもあり得ないのだから。

實を言へば、自分は自分一人の身をすら持てあまして居るのだに、何で外を顧みる邊があらうぞや。自分は久しい間難治の病氣に罹つて、この命一條を繋ぐにすら毎日く一通りや二通りの苦勞では無い。それに家には妻もあり子もあり戴白の老父母もある。自分は誠にいさゝかな財産と収入とで彼等を養ひ、慰め、又育てねばならぬ。この仕事一つでも自分の境遇を解する人ならば、如何なる健全なる人にも決して容易しい事とは思はぬであらう。併しながら、自分は斯様な事に思ひ悩むで自分の爲すべき事を忘るゝまでに弱い者でも無い。苟も此の心だに確かに安立してあるならば、ナニ少しの病氣や貧乏に打勝つて、随分爲たい事も爲し得ぬではない筈だと信するが、さて此の心が如何にも思ふ儘にならない。外には生活の爲に戦ひ、内には病苦の爲に悶きつゝある自分は、更に病よりも貧よりも、恐らくは天下の如何なる物よりも強い『己れの心』と云ふ大敵と闘はねばならないのだ。病ひは苦痛な



き時には忘れる事も出来る、貧乏は心がらで如何にも慰め得られる。されど誰れが自分自らの心より逃るゝ事が出来やうか。自分はこの大敵に遇つて凡ての精力を傾け盡したのだ。

自分は自分の心の苦しみの何物なるかに就ては別に語るを要しない、それは大かた自分の分別の浅かりし爲め、或は意志の弱かりし爲め、或は感情の變り易くして激しかりし爲め——約りは自分の性格のあらゆる弱點に歸するであらう。自分は、自分の境遇が寧ろ通常人の幸ひとすべきものであつたにも拘らず、自ら求めてかゝる不幸を醸したことに就ては、少からず自分自らの性格を憐れみもし、且つ時には悔みもするが、併し既に醸し得たる心の苦しみ其物の儼然たる事實なることに於ては、遂に如何ともする事が出来ぬ。丁度ロバート・エルスミアがその懷疑の深淵に陥つて『あゝ神よ、妻よ、仕事よ』と叫んだ様に、自分は自分の存在の根柢が或る悪魔の手斧によりて打たれつゝある様に感じた。自分は暗黒の中に立つてこの悪魔と格闘を試みたが、自分の力が勝てば勝つ程自分の胸の苦しみはますます激しくなる。自分は自分の剣を以て斬る所の敵は自分の胸にあることを忘れたのだ。自分は愕然として胸に手をあてた。そして自らの刃の痕より混々として流れ出づる血潮によりて自分の喉を

潤した時、悪魔の聲は吾れ自らの聲の如く『吾は汝なり』と勝ち誇りけに自分の心の耳に囁いた。——あゝその後の自分は如何なつたか。又如何なりつゝあるのであらうか、自分は多く語るに忍びない。

斯様なことは自分の口より多く言ふべきで無からう。兎も角も、與ふるものは富まねばならず、教ふるものは知らねばならぬ、自ら火ならぬものが如何にして他を火にすることが出来やうぞ。自ら己れの體を持餘して居る自分の様なものが、まあ如何して世の人々の爲す如くに人の爲とか、或は世の爲とかに盡すことが出来やうぞ。若し人は己れの爲に生きて居るとすれば、自分はイゴイストたらざらむと欲するも得ないのである。

## 二 病氣の福音

自分が多病だから斯う言ふのではさら／＼無いが、病氣と云ふものは健康な人が想ふ様に忌み嫌ふべきものでは決して無い。眞に病中の趣を味つた人から見れば、健康な人の方が却て氣の毒の様にも見えるであらう。



病氣は吾々の體を弱くするが、其代りに吾々の精神の上にさまざまの貴むべき影響を與ふるものだ。濁れる心情を清め、淺墓な思想を深くし、動き騒げる胸を靜かにし、忙がはしき此の日常の凡俗生活の中にて吾々の想ひも寄らざる幾多の精神上の經驗を與へ、且つ吾々の心靈の上に最も嚴肅なる平和と光明ある希望とを與ふるものは實に此の病氣の力である。此の病中の趣味は、とても健康な人の窺知を許さざる所謂現身證悟の三昧であるのだ。

故に病氣の日は、徒らに藥を飲み眠りを貪るべき時では決して無い、即ち是れ吾々の肉身の苦しみの犠牲の前に、精靈の福音が祭壇の上に現はるゝ時である、ことを覺悟すべきである。佛家では昔より病時を以て發菩提心の好因縁となし、聞法省察の無上の機會として取扱つて居るが、決して佛家のみ然るべき筈では無い。あらゆる宗教家、思想家、詩人などには常に是の覺悟が無くては叶はぬ筈だ。

病氣は身軀の方から觀れば「死」の攻撃である。あゝ、「死」！ 此の世の中で此れ程忌み嫌はれて居るものは無いが、さりとて淺はかな人心ではあるまいか。あゝ是の「死」を除くならば、何處に宗教があるであらうか、何處に哲學があるであらうか、また何處に詩歌

藝術があるであらうか。人生のあらゆる幽妙高遠なるものは實に此の「死」に對するの安心、希望、解釋、裝飾の爲に作られたるものではあるまいか。若し吾人に是の世に於て思ふがまゝにあらしむるならば、願くは生きながら死にたいものだ。そしてこの現身によりて文藝、哲學、宗教の活ける解釋を得たいものだ。併しこんな望みが無理であるとしても、吾々は決して失望するには及ばぬ、吾々の病氣と云ふものになり得るでは無いか。病氣とは他方より見れば半ば死ぬるの謂ひだ。生きながら全るで死ぬる事が出来ぬとすれば、セメテ生きながら半ば死ぬることがまだしもの樂みではあるまいか。病氣の福音は即ち死の福音であるのだ！。

それで自分は斯う思ふのである、——未だ曾て死の福音を耳にしたことの無い人が、如何にして宗教家たり、哲學者たり、又詩人、美術家たる事が出来やうか。健康の身軀を有つて牛馬の如く飲み、食ひ、走り、動き、犬の吠える様に議論をし、羊の様に書物を食つて居る人が、如何してこの人生のまことの味をかみしめることが出来やうか。「健全なる身軀には健全なる精神」といふ諺がある、これは凡俗社會の常識を標準とする人間に就て言つた極めて凡俗なる訓言である、自分は却つて不健全なる身體にこそ健全な精神は宿り得ると言ひたい位だ。



斯んな事を書いたら、讀者の中には自分の考を病的として笑ふ人もあるであらう。あゝ病的！、なんで病的が悪いであらうか。自分が果して自分の思ふ様な意味に於て病的であり得るならば、此世に於ては是れ程仕合せなことは無いと平生思ひもし、又願ひもして居るのである。ナニモ御多分に外れまいとならば、馬や牛の眞似をするまでだが、それでは此の世の中があまりあつて無いではあるまいか。——ああ自分の考は何處まで他様のと違つて居るのであらうか。會通の程も覺束ない、言ふだけ野暮であつたのかも知れないのである。

### 三 ロバート・エルスマア

望ましい事では無いが、先にも述べた通り、病氣も吾々にとりての敷入時で、常には得難い慰みを得ることが出来る。自分はこの頃病褥の上に暮した一月ばかりの一部分を、例によりて小説讀みに過した。勿論西洋の小説だ。中にはヨークイヤ、ゾラや、又は近頃獨逸の友人から送り越したワグネルの樂劇などもあつて、何れも多少の面白味はあつたが、其の中で最も自分を動かしたのはハムフレードワード女史の『ロバート・エルスマア』であつた。

この小説は、十數年前の出版で、歐米の社會には隠れもなき著名なる作であることは誰も知つて居る事であるから、自分は今更らしく吹聴するにも及ばぬ筈だ。併しながら、一度は讀みたいと思ひながらツイ今日まで機會がなかつた。自分の新しき感觸の一端をお話することも必ずしも無益ではあるまいと思ふ。勿論今の本邦の小説とは違ひ、七百頁にも近き一大冊子の梗概を述べることは出来ない。又ワード女史の文學上の位置并に是の書の價值に關する批判も概ね歐米文壇に定論があるのである。今日、自分は是等に就て兎角の意見は申すまい。唯、自分は『ロバート・エルスマア』の中に描かれたる社會及び人物を觀て、つくづく今日の我邦に感ずる所があるから、それを簡單に述べたいのである。

十九世紀の後半紀に於ける宗教心の變動、それに伴へる虔信家の信仰上の苦悶、懷疑、及び基督教の新解釋に本づける新信仰の樹立、——是の徑行を證明するのが是の書の大目的で、主人公たるロバート・エルスマアは即ち是の時代精神の權化として現はされて居る。想ふにエルスマアの時代は、歐羅巴、少くとも英吉利に於ては既に經過したであらう。併しながら其の餘波は尙ほ我邦の如き新開國の宗教社會には残つては居るまいか。自分の見る所では、



エルスマアの時代は尙ほ我邦に於て経過して居らぬ。併しながらロバート其人は果して何處にあるのであるか。

基督教界に於て幾多先覺の名士が其の信仰の變遷に煩悶した事實は吾々の現に目撃した所である。併しながら彼等は如何にしてこの煩悶を解脱し、如何にして新信仰を求め得たのであるか。吾人は不幸にして其の形跡を審つひらにしない。唯、最も明なのは信仰の變遷に惱みたる教界の所謂名士が、何時しか或は聖書を捨て、算盤を取り、或は讚美歌を歌ひたる口にて米相場の符牒を呼び、或は天國の鑰を握りたるものが藩閥政府の官吏と化したる等の事實である。而して又同時に最も明なるは、是の煩悶を切り抜けて「基督の新同胞」を組織したるロバート・エルスマアの如き虔信、眞摯、剛邁、不屈なる人の殆ど一人も無かつた事實である！

暴風の後にまことの天氣が来る如く、煩悶の後こそまことの平和が来る。大いなる誘惑と大いなる懷疑とに打勝つた信仰でなければ、とても一代の人心を指導することが出来ない。彼等は彼等一人の身をすら保ち得なかつたではないか。

詩人キーツの言葉に「自分自らの脈搏の上に試みられたるものに非ざれば、公理も公理と

は言へぬ」と云ふことがある。あゝ手に聖書を取り、口に讚美歌を歌ふものが信者であり得るならば、世の中はまことに幸ひであらう。併し眞理は口より口に傳へべきもので無い、金銭で購ひ得べきもので無い、吾々は皆自らの血を以てそれを證さねばならぬのだ。我邦の宗教家などが果して吾々に何を爲し得るものぞ。

ロバート・エルスマアの師たる牛津大學オックスフォードの教授ヘンリー・グレーに就ても自分は少からず感慨に打たれた。エルスマアは是の人の精神的感化によりて信仰の門に入り、而して又是の人の眞摯なる審斷によりて懷疑の苦しみを脱した。嘗にエルスマアに對してのみならず、グレーは當時英國社會の一大勢力として常に精神界の北斗と目ざされて居つた。自分は思ふ、是の如き人が若し今の我邦の大學に求むることが出来るならば、今の青年はどんなに力強く思ふであらう。知識の受け賣をする職人根性のプロフェッショナルや、高が活字引いじりの腐儒等は吾等の精靈の上に何の力を有するものぞ。若し吾々がエルスマアの如き懷疑の淵に陥りて生死の苦悶と戦ふ時、仰いで救ひを求め得るグレー其人の如き人は何處にあるであらうか。聞けば、グレーは小説中の假設的人物ではなく、かの有名なる「倫理學入門」の著者たるトーマ



ス・グリーン<sup>ス・グリーン</sup>の事であるとの事。あゝ我邦の大學の倫理學の先生がこのグリーン<sup>グリーン</sup>の様な人であつたならば……と自分はつくづく思ひに沈んだのである。

小説は決して戯れ事のみでは無い。この書の如きは隨に吾々の一部の精神上の生活を代表して、その中に少からぬ訓へと慰めを含んで居る。眞にロバート・エルスマアの物語を身讀し得た人があるならば、是の日本の社會も尙ほ光明を存して居ると云ふものだ。殊に自分は今の枯淡、無味、凡俗至極なる道學先生や村學究先生に、つまらなき倫理書などよりも是の様な書物に就て人生の活ける趣味を味はむことを勸むるものである。

#### 四 自分自らの大善人

世間の人々は口を開けば輒ち世の爲め、又は國の爲めと言ふ。併しながら世の爲め國の爲めと云ふことが、此の自分を離れて果して何等かの意味を有ち得るか否かといふことに就ては、自分は尙ほ疑ひの中に在る者だ。自分自らの存在を撫無して何處に人生の意義を求むることが出來やうか。宗教は無我を以て人道の大歸として居る。もし是の所謂無我が我れの存在

の最高狀態を示すものでないとすれば、自分は毫も宗教の貴むべき理由を解し得ざる者だ。自分は素より社會や國家の存在を是認する、併しながら吾人は彼等の君主であることを忘れてはならぬ。臣下とは必ずしも貢を納むるものの謂ひではない。カイゼルの物はカイゼルに還すが宜しい。併しながら精神的に彼等の存在の根柢を約して居るものは、吾人自らであることを忘れてはならないのだ。斯んな考へを有つて居る自分は恐らくは世間の道徳から見れば悪人と謂はるべきものであらう。併しながら是の如きことは少しも悲しむに及ばない、外から見るとどんな悪人であらうとも、自分は自分自らの大善人であるのだ。吾々は他人が辛いと言ふたとて、自ら砂糖の甘きを欺くべきでは無いではないか。

併しながら自分だからとて木の股から生まれたものでもなく、又沙漠の中で育つたものでもない、今茲まで三十二年の春秋は、矢張り此の世の中で人並に暮し來つたのだ。學校に入つて人並の教育も受け、人並に書物も讀み、色々の人にも接し、種々の事にも關はつて、つらい目にも嬉しい目にも先づ／＼人並には出遇つた積りだ。一口に言へば、自分は世間の最も多くの人と同じく時代の蠢々たる産物の一つに過ぎないのだ。されば自分の精神が、此の



時代の感化を離れて獨立して居るとは素より思はないし、また獨立し得るとは猶更、自分は考へない。自分は何處までも此の世の中の影響を受けて居るに違ひない。違ひないが、自分は此の影響に對して恨みもせぬ代りに、別に喜びもしないものだ。それは自分の存在に關する價値の標準は「我」の満足の外には、何物にも求むべきでないことを自分は確信して居るからである。されば自分の様なイゴイストの云爲にも、時としては社會とか國家とかの爲に何等かの意味のあることも無いでも無からう。併しながら是れを以て自分を批判する人があるならば、それは間違ひと云はねばならぬ。自分の思ふ所は別にある。是の如きはつまり自分にとつて偶然の結果であつて、自分の初めより眼中に措かなかつた事が、何かの機に、或はおのづから外に現はれたに過ぎないのだ。イゴイストたる自分を外にしては、別に自分といふものが此の世の中には無かるべき筈と自分は固く信じて居るのである。

自分は社會や國家の中には存在して居らぬ、社會や國家が却て自分の中に存在して居る。——自分は此の單純な信條の下に精神上的の生活を營みつゝあるものだ。あゝ是の如くにして生活することが果して罪惡であるのであらうか。

(明治三十五年三月)

### 本末の顛倒

當今史料編纂先生ありて歴史家なく、哲學史家ありて哲學者なく、教育學者ありて教育者なく、道學先生ありて徳行家なし。甚しい哉、本末の顛倒せらるゝ事や。

### 今の哲學

ソクラテース曰く、哲學は死に對するの道なりと。洵に是の究竟の安心を與へずむば、宇宙の知解、我れに於て何爲るものぞ。知らず、今の哲學、訓ふる所果して何の道ぞや。

### 自ら欺く無くむば幸也

曾て倫理専門の新學士に告げて曰く、卿等百歳にして道義を説く、可也。昨日校舎を出でて今日人の子に教ふ、危からずや。人生の幽微、素と文字の外にあり、讀書萬卷、自ら悟る無くむば畢竟死學のみ。卿等自ら欺く無くむば幸也。



中心果して信ずる所ある乎

人生は事實也、空理に非ざる也。漫りに主義を標榜し學説を糊塗す、畢竟何の關する所ぞ。道學先生、好んで理を談ず、疑ふらくは中心果して信ずる所ありて然る乎。

學説と人格

知は易く信は難し、百知ありて一信無からむには、初めより學ばざるに如かじ。今の學者の爲す所を見るに、漫りに先人を是非して折衷を事とする者多し、抑、何の呆癡ぞ。其人を知りて其説初めて解すべけむ。是の間、何ぞ道學先生が皮相の是非を容れむや。而して唯、同じき者のみ同じき者を解す。道學先生の解し得る人物は、道學先生自らに過ぎざるのみ。

人々自ら悟らざるべからず

喇嘛去り、モルモン來る。去來我れに於て何の關する所ぞ。今や、信仰は外にあらすして内にあり。人々遂に自ら悟らざるべからず。外にあるものは儀禮のみ、否されば職業のみ。世の宗教と謂ふもの即ち是れ。

空腹高心

己れ能く先人に若かむと欲せば、亦同じく先人の學びたる所を學ばざるべからず。何ぞ今の青年輩の空腹にして高心なるや。

道義亡國

唱歌には公德唱歌、菓子には教育菓子、遊戯には德育遊戯、聖代の文物又燦然たりと謂ふべし。夫れ邦の無道を以て仆るもの、尙ほ起すべし、道義に溺れて亡ぶるものに至つては遂に救ふべからず。吾人潛かに以て憂と爲す。



何ぞ思はざるの甚しき

嗚呼、天下好く書く者の多くして好く讀む者の少きや。情激する時、語逼らざるを得ず、理絶する時、理、明なるを得ず。機微言外にあり、嘯嘯として唇頭に上らず。人は即ち壯語を作して他を欺くものと爲す。何ぞ思はざるの甚しき。

心に會するもの唯、是れ心

理の争ふべきもの、其事初めより争ふの要なき也。心に會するもの、唯、是れ心。要は人自ら悟るにあり。腐儒席上の談の如き、吾れに於て風馬牛のみ。

何ぞ人の異を妨げむ

理の精しからざるを怪しむ勿れ。精ならざるは粗ならむが爲のみ。吾れは唯、吾れに同じきものを求む、何ぞ人の異を妨げむ。

千萬言唯、意のまゝのみ

若し偏へに理を争はば、吾れ不肖なりと雖も豈俄かに學究先生の後に落つるものならむ。千萬言唯、意のまゝのみ。區々の辯折何ぞ卿等を待つて知らむや。

吾は永く吾たらむ

人はニーチェを言ふ、唯、願くは吾れをして永く吾れたらしめよ。ニーチェは天才、望むべし、即ち即くべからず、千歳に獨歩せしめて可也。

十九世紀文明の王冠

遮莫、吾れはニーチェを好む。十九世紀文明の王冠として見るべきもの、正しく彼れに非ずや。彼れの病的なるを咎むる勿れ。十九世紀文明其物の甚だ病的なるを如何。



笑はむ乎、狂せむ乎

天才は狂し、俗物は笑ふ。吾人の社會は世々是の如きのみ。生を是の世に享く、とくく俗物となりて笑はむ乎、將た天才となりて狂せむ乎。

吾をして詩人たらしめば

吾れをして詩人たらしめば、願くはキヨルネルたらむ。人を愛し、國に盡し、自ら甘んず。青春の死、何ぞ夫れ美はしき。才名一世に曠くして、令聞後に洽ねし、吾れに於て素より閑然する所無し。

唯、夫れキヨルネルたる能はず、願くはバイロンたらむ。バイロン尙ほ能はずむば、願くはハイネたらむ。彼れには惡魔の力あり、此れには毒蛇の舌あり、尙ほ以て一世の俗風に甘心するを得む。

言論畢竟人物のみ

書を寄するものあり、曰く言論畢竟人物のみ、足下の近狀憐れむべきが如しと。嗚呼果して然る乎。吾れ豈自ら憐れむべきを知らざらむ、若し夫れ憐れんで而して自ら樂しむの境地は即ち足下等の知らざる所に屬するなからむや。

然り、言論畢竟人物のみ。吾心近來靜穩を缺く、猶ほ水平の風に亂るゝが如き乎。詩あり曰く、

吾がこゝろ、波にも似て碎けたるか。など圓かのまゝに寫さざる、大空高く澄みわたる月。

吾が文素と文に非ず、其詩も亦詩に非ざる也。

米と砂

萬物は人類の爲に造られたるものに非ず。人類は其の生存の目的を達せむが爲に取捨する



所無かるべからず。彼れの糧は米たるべし、砂たるべからず。怪しむ、人は何故に精神上の糧に於ては米と砂とを撰ばざるや。

其愚や及ばず

萬物、何物か知識の對境たり得ざらむや。若し我れをして腐儒の心だにあらしめば、一塊の土石に對する百卷の著述、必ずしも難事にあらざらむ。然れども是の如き知識、畢竟何の用ぞ。知るべきことを知らざる、是れ愚也。然れども、知るまじきことを知るの愚に及ばざるや遠矣。

道學先生の世界

吾人は道德の受賣を業とする夫の道學先生を卑しむ。品性の陶冶は偉人の事たり、今の道學先生の造り得る人物は道學先生自らに過ぎざるのみ。

假りに是の世界の人間をして悉く道學先生の如き人物たらしめば如何。吾人は魯仲連を學びて、東海を蹈んで死せむのみ。

何ぞ一に煩瑣なる

兒童心理が教育上に應用せられざりし時代にありても、日吉丸は無事に育ちたりき。ゲテ、ルーテルの幼時には、道德的遊戯を強ひらるゝことあらざりき。當世の事、何ぞ一に煩瑣なる。

口耳の學

口耳の學は口耳の人を造る。人物獨り人物を造り得べし。道學先生よ、眞に世道人心の爲に計らむと欲せば、百卷の著書よりは、一身の徳を修めよ。人々自ら悟らざるべからず。

罪は貧民にあり



近時貧民の惡を爲すもの、人動もすれば、社會の罪と言ふ。罪は貧民にあり、何ぞ社會にあらむ。彼れ惡を爲すに先ちて既に貧弱てふ大罪を犯したるに非ずや。強者と天才とは常に道德を超越す。彼等より見れば仁義は弱者の武器に過ぎざるのみ。

(以上明治三十四年十月)

### 田中智學氏の『宗門の維新』

吾人は久しく田中氏の名を聞けるも、未だ其の人を知らず、日蓮宗の教理沿革等に就ては素より一門外漢たり。而も茲に氏の近著『宗門の維新』に就て一言せむと欲するは、是の書が末法五濁の當世にありて、教祖日蓮の偉大なる精神を繼紹せる所に同情を禁する能はざるものあれば也。

著者は開卷の劈頭に於て、本化の妙宗は宗門の爲の宗門に非ずして天下國家の爲の宗門也と喝破し、是れ日本國家の應に護持すべき宗旨にして亦宇内人類の必然同歸すべき一大事因

緣の至法也と唱道し、此の大事緣を宣傳せむが爲に日蓮聖祖は我邦に垂化し給へりと説き、今の宗門は數百年來の歴史的腐敗の爲に全く其の本分を亡失したりと慨き、聖祖の宏猷を恢復し、宗門の妙用を光顯せむが爲に、茲に宗門改革の根本義を明にせむと揚言し、而して後、斷じて曰く、『予は此論篇の云ふ如き宗門に非ざれば、日蓮聖祖の宗門に非ずと爲し、又此宗門の改造は單に宗徒の間にのみ唱ふべきものに非ずして、日本國家の應に大に注目すべき最高問題也と爲すもの也』と。何ぞ其の宣言の高大にして其の意氣の猛烈なるや。吾人は先づ是の開卷第一章に感激して編を終るまで遂に手を釋く能はざりき。

著者の所謂改革論の大綱は、宗法に於て復古的態度を探り、制度に於て進歩的態度を取り而して全體を統率するの一大精神として、侵略的態度を探らむとするにあり。所謂侵略的態度は、日蓮の法華折伏の大義にして、著者の是れに論及するや氣魄雄大、光焰萬丈、蓋し本篇の大主眼の存する處、亦著者最も得意の壇場たるが如し。其の要に曰く、人類を一妙道に歸せしむるには、先づ一大勢力を事實の上に建立せざるべからず。國家を以て道教の原動力とする教旨即ち是れ也。曰く、日本をして宇内を統一して永く宇宙人類の靈的巨鎮たらしめ



ざるべからず。是れ宇内清廓の爲也、人類救済の爲也、而して是れ聖祖立教の大義、天祖建國の要道にして、兼ねて釋尊塔中付囑の元意也。曰く、是の大理想を唱道したる聖祖日蓮は正しく世界統一軍の大元帥也、大日本帝國は正しく其の大本營也、日本國民は其の天兵也、本化妙宗の學者教家は其の將校士官也、事觀高妙の學見主張は其の宣戰狀也、折伏立教の大節は其の作戰計畫也、信仰は氣節也、法門は軍糧也、四大格言は軍規の振肅也、本化妙宗の日本國教奠定は完く其の出征準備也と。著者は是の大法鼓を鳴らして先づ宇内統一の大理想を建て、是の大理想を實現するに先ちて内亂鎮定の必要ありとなし、既に法華折伏の四字を以て宗を立てたるもの、四大格言の麾下に立ちて飽くまで一切の邪宗邪教を討伐せざるべからずと説き、終りに大々的氣焰を吐いて曰く、

寺院の門石を見ずや、その「一天四海皆歸妙法」、「闔浮提內廣令流布」の文字は、日夕出入の緇素に侵畧を號令する也。久遠寺、本門寺、本國寺、妙法華經寺、妙顯寺等、是れ皆相對的對破の名に非ずや。「侵略的」の徽號ならずや。侵略的に信仰せよ、侵略的に説けよ、侵略的に書けよ、朝々夕々造次顛沛も侵略的意氣を充たせよ。本山を參謀府とせよ、檀林を練兵場とせよ、一切すべて侵略的理想に

行動せよ。「コーラン乎劍乎」は猶ほ甚だ緩弱也、須らく「法華經は劍也」と曰へ。老嫗も杖を揮つて世界統一を説け、幼童も鼓を鳴らして「法王進軍の曲」を歌へよ。利の爲に祈る勿れ、身の爲に祈る勿れ、父母の爲に祈る勿れ、師の爲に祈る勿れ、只、侵略の爲に祈れよ、侵略の爲に死せむと祈れよ。侵略に非ざれば言ふ勿れ、動く勿れ、視る勿れ、聽く勿れ、侵略的意味なき勸化に布施する勿れ、侵略的ならざる布教に奔走する勿れ、侵略的氣節あらざるものは速に宗門を去れ。死せる萬人を有するよりは生ける一人あるに如かず。況や七千の僧侶、三百萬の信徒、一たび昏睡より起ち、警呼應同して異體同心の大節を復し、一舉して侵略突貫の聲を齊しうせば、山岳震ひ湖海動くの概無くむばあらず。侵略なる哉、侵略なる哉。(廿三、四頁)

讀者は以上の叙述によりて略、本書の目的及び文章を想像するを得べし。著者は別論に於て教會の組織を説き、附録に於て妙宗の未來を予想せりと雖も、其の主腦とする所の「侵略的態度」以下の數章に存するや明らけし。其の意氣の猛烈なる、其の抱負の高大なる、其の理想の深遠なる、而して其の文章の雄偉なる、吾人は以て近時宗教界の一大文字なりと賞賛するの決して溢美に非ざるを信する也。

人の傳ふるを聞く、著者は平生熱心なる日蓮の崇拜者たるの故を以て日蓮狂の名ありと。



狂か、癡か、吾人得て是れを知らず。而れども萎微衰弱を極めたる今の宗教界に於て、敢て日蓮の後身を以て自任するもの、著者の如きあるは、吾人の甚だ喜ぶ所也。法華折伏、破權門理は實に日蓮が布教三十年間の一大主義なりき。彼は是の主義の爲に住所を追はれたること二十餘度、或は暴民の爲に衣襲せられ、或は法敵の爲に狙撃せられ、遠流に處せられたること二度、或は斷頭の圓座に坐し、或は弟子を殺され、法を路傍に説けば杖木瓦礫を投ぜられ、道を壇場に講ずれば罵詈惡言に恥しめられ、打撲刃傷殆んど身に絶ゆる事無かりき。是の如きもの前後實に二十有二年、而して迫害いよく大にして折伏愈々烈しく、天下の威武に面して一步も退讓する所あらざりき。北條氏遂に屈し、榮爵を授け美田を贈りて宗門の弘通を允許し、請ふに諸宗の折伏を中止せむことを以てするや、彼れ昂然として曰く、日蓮の教を弘むるは釋尊の遺命のみ、一北條氏の許否、我れに於て何かあらむ。法華折伏は聖經自爾の大義、救世根本の方便、釋尊の行者一日も是の事無かるべからずと。嗚呼何ぞ其の主張の嚴明にして其の意志の猛烈なるや。吾人は日蓮宗に於て一門外漢のみ。今に於て尙ほ法華折伏を標榜するの可否は吾人の得て知らざる所なりと雖も、田中氏が二十年來、内外の障礙

に抵抗して終始其の主義を枉けず、斷々乎として益々其の侵略的態度を擴張するの一事は、少くとも其の教祖の偉大なる精神に感孚せる所ありと謂ふべし。吾人深く其の志を壯とし、其の行を偉とす。其の文章亦彷彿として高祖遺文の流韻を傳へたるが如き、亦吾人の欽羨に堪へざる所也。

嗚呼、世に閑文字多し。言はざるべからずして初めて言ふもの、果して幾何ぞ。田中氏の是の書の如きは眞に言はざるを得ずして言へるものか。其説の當否如何は暫く措き、世人は須らく憂世者の最も眞摯なる憤慨録として一讀の勞を吝むべきに非ざる也。

(明治三十四年十一月)



### 天才の出現

我れは天才の出現を望む。嗚呼、日蓮の如き、奈破翁一世の如き、詩人バイロンの如き、大聖佛陀の如き、哲學者シヨペンハウエルの如き、英雄豪傑は最早や此世に出づる能はざる乎。久しい哉、我れの凡人に倦めることや。

### 天才の犠牲

世に凡人の數幾十百千萬億ありとするも、人類に於て何の益する所ぞ。願くは彼等の十萬を割いて一バイロンを得む。願くは彼等の一百万を割いて一奈破翁を得む。我れに一日蓮を與ふるものあらば、願くは代ふるに一千萬の凡人を以てせむ。我れに一釋迦を與ふるものあらば、一億萬亦惜しむに足らざらむ。  
人よ怪しむ勿れ、彼の木偶に禱るもの猶ほ且つ犠牲を供ふるに非ずや。天才にして得らるべくむば、如何なる犠牲も決して貴からざる也。

### 天才無き世界

吾人の世界より天才を除き去れよ、残る所果して何物ぞ。歴史は空虚とならむ、世界は暗黒とならむ、人生は寂莫たらむ。吾人夫れ何に頼り誰を憑みてか此世に生存すべき。天才は正しく社會の名譽也、國家の寶冠也、人類の光明也。

### 平等主義と天才

平等主義は訓へて曰く、人には凡て平等の人格あれ、平等の發達あれと。是の如くにして無数の凡人は作られぬ。

天才は吾人に訓へて曰く、爾等力めて我れの如くなれ。我れは是れ強者と優者との先驅也と。是の如くにして天才は靈性の慰藉也、進歩の理想也、未來の光明也。

吾人凡て是れを憎む



吾人は恐る、餘りに多くの人は生れたるに非ざる乎。凡俗至極なる平等主義は是の如くにして行はるゝに非ざる乎。天才は是の如くにして狂者として迫害せらるゝに非ざる乎。天才の出現を沮害するもろくの教育主義、道德主義、吾人凡て是れを憎む。

二個の眞理

『朝に道を聞いて夕に死するも可也』。是れ孔子の教なりき。  
『早く其の杯を空しくせずや、其の泡の消ゆるに先ちて吾人の命の消えざることを誰か保せしや』。是れアナクレオンの歌なりき。  
吾人は思ふ、是れ人生に於ける二個の最も大いなる事實にして、亦二個の最も大いなる眞理也。

偉人と凡人との別

偉人と凡人との別は一言にして盡すべきのみ。彼れは人生を簡單にするもの也。此れは人

生を複雑にするもの也。

本能の命する所、其處に人生の最も大いなる事實あり。夫の煩瑣を以て精緻と稱し、迂遠を以て妥當と爲すもの、そもく人生直下の事實を如何と見る。

哲人、言あり、曰く、基督教徒は世に唯一人ありき、而して彼れは十字架の上に死したりきと。

價值と我

人生は價值也、而して價值は我れ自らの造る所也。世に我れ自らの造らざる價值ありとすれば、是れ我眼の外に色ある也、我耳の外に聲ある也。

天下誰か我が價值を解するものぞ。文字は上下大小是非を論ずべし。價值は唯、心を以て心に傳ふべきのみ。

他の言動によりて左右せらるゝもの、是れ既に價值無き也。價值無きもの、是れ既に我れ無き也。我れ既に没しぬ、人生の意義亦求むべからざる也。



悪を憎むこと何ぞ甚しき

進歩の旗章は多く革命者流の頸血に染められたりき。而して革命者流は概ね當代の元兇たりき。世間何ぞ悪を憎むことの爾かく甚しき。

癡狂院

世界は悪者に負ふ所あるが如く、又深く狂者を徳とせざるべからず。

ナザレの故園に歸り、以賽亞六十一章の破題を吟じて、是の録るされたる事、今日汝等の前に應へりと叫びし時、誰かイエスを狂者なりとせざるべき。龍の口に引かれむとするや、赤橋の前に立ちて八幡大菩薩の緩急を罵りたる時、日蓮を狂者と思ひし者は獨り彼れの法敵のみに非ざりき。彼等をして今の世にあらしめよ、癡狂院裏の一患者として待遇せらるゝの外、何處にか救世主あらむ、何處にか釋尊の行者あらむ。

謹する者曰く、癡狂院は是れ無數の凡人が、其の平等主義の保護の爲に設けたる恰好の武器也と。好諧謔亦多少の眞理無しとせず。

ニイチエの批難者

○世に天才を解し得ずして是れを批評するほど笑ふべきことは無い。今のニイチエの批難者の如きは大抵是の類だ。

○讀賣新聞に、馬骨人言と云ふのを書いて居る匿名先生があるが、連りにニイチエの攻撃をやつて居る。何人にも解し得らるゝ事だけは書いて居るが、超人や、轉生などの事になると流石に俗學者の知解に入り難いと見えて一言も述べて居らぬ。こんな手際でニイチエを批評し得らるゝものならば、世に批評ほど容易なものはあるまいよ。

○自體ニイチエは學者では無い。随つて其の言ふ所を學說などに見るが抑、の誤りだ。彼れの述ぶる所は學說以上の理想、學說以上の想像、謂はば人間靈性の呼吸を以て直ちに人の肺腑に通ずるにあるのだ。それを俗學者流が自家の歴史論や倫理見などに據りて彼れ是れ言ふ



のは何たる間違ひであらうぞ。斯かる俗學者流に一大頓悟を與へむが爲に、取りも直さずニイチェは生れ出たのである。

○讀賣の馬骨先生は、やれ個人主義が如何だの、やれ歴史的發達が如何だの、やれアナクロニズムがあるの、やれ盲目反動だのと、是れ迄の俗學者の言ひ腐らした事を珍らしげに陳べて居るが、是れでニイチェが解つた積りで御自分は居らるゝのか。ニイチェ一代に三段の變化など人並みの事は言つて居るが、なんで斯かる先生に其の様なことが解らうぞ。ハヅロク、エルなどのお里が見え透く様で、何共以て笑止の至りだ。

○其の癖、やれニイチェはゲーテを讀むだことあるまいの、ルソーは恐らく解らなかつたらうのと、齒の浮く様な通を並べらるゝが、英譯でファウストを窺つたとて、何で是れがゲーテ通と謂はれやう。況して他人がゲーテを讀むだの讀まぬとの詮議立ては、人の手前チト御控へなさるゝが宜しからう。斯んな無用の辯を弄する暇があるならば、ニイチェの妹さんの書いた傳記や、ザラツストラでも熟讀なさるゝが御爲だよ。

○扱て其の言ひ方の輕薄さ加減と來ては目も當てられない。馬骨先生とは何れ早稻田あたりの末派でもあらうが、御師匠様の諷諧の筆が如何に輕妙だからとて、斯かる問題にまで下手に眞似られては、如何にも人品が見え透く様で御爲になるまいと思はれるのだ。

### ニイチェの歎美者

○我輩はゲーテや、バイロンや、ハイネや、日蓮や、一世奈破翁を歎美すると同じ様にニイチェを歎美する者である。ニイチェは前にも言へる如く、學者ではない。況して實踐道德家などでは猶更ら無い。彼れは生知の詩人だ。詩人として其の理想の崇高なること、其の想像の偉大なることは殆ど人心のはたらきの最高潮に達して居る。殊に十九世紀末の惡文明に育てられた吾々にとりて此上もない靈性の慰藉と謂ふを憚らない。

○世にはニイチェの歎美者と謂へば、直ちに其の所説の實行者として驚怖する者があるが、まあ何と謂ふ馬鹿氣た事であらう。如何にゲーテの歎美者だとして、自らファウスタリ得る者があらうか。如何にバイロンの歎美者だとして、マンフレッドや、サルダナパラスが眞似らる



るものであるか、如何であるか。ハイネや日蓮の通りには、一日も是の國には居られまい。奈破翁を真似たらば恐らくは直ちに集鴨(集鴨)に送らるゝであらう。

○吾人が天才を歎美するのは、吾人の精神的生活を豊富にし、是れによりて自ら慰め、自ら勵み、かねて是の世に處する安立の地盤を求むるにあるのだ。俗學者流の生活する世界以上にて、吾人の理想的天地を建設するの希望は、是等天才偉人の先蹤によりて少からず確められ、且つ勵まざるのだ。吾人は是の希望によりて吾人の人格を修養し、吾人の信仰を堅むるのだ。是の間の消息は、歴史論や、アナクロニズムでニイチュを批評し得たりとする輩の窺知を許さぬのは言ふまでも無いのである。

(明治三十四年十一月)

### 自然の兒

吾等は是の如き言の或は世に誤られむことを恐る。されど吾等をして自然の兒の如く語りしめよ。

### 何が故ぞ

世に若き女の容つくれるばかり美はしきは無し。彼れ何が故に其の容を装ふや。野に咲ける百合の花を見よ、ソロモンが榮華の極みだにも其の榮え是の花の一つにも及ばざりき。花や何が故にまかく麗はしき。鳥の樹間に歌ふとき、彼れ何の情ありて其の歌のかくは妙なるや。黄金色なる木の實の枝も撓はなる態の如何にうるはしきよ。木の實はた何の心ありて寂しき秋に獨り打ち笑める。

### 貴き哉是の賚

人よ、自然の大いなる力の是の間に活らけるを見ずや。是の力無くば人には若き女の笑顔なく、野には花の色は美はしきなく、森には鳥の歌の妙なるなく、春はさながら秋の如くにして、世は限りなき沙漠の如くならむ。大いなる哉是の力、貴き哉是の賚。吾人に祈るべき神なくむば、願くは先づ是の自然の大いなる賚を讚美せむ。



性 慾

怪しき哉、是の大いなる貴き賚の吾等の社會に賤しめらるゝ事や。惡魔の如く詛はるるに非ざれば、其の名決して彼等の口の上らざる也。彼等胸に是の賚を抱けども、それを隠すことさながら盜める物の如き也。斯くてあらゆる惡名は是の賚の上に被らせられぬ。眞理の外に何物をも知らずと稱する科學が名づけて性慾と呼べるもの、あゝ是れ彼等が是の賚に與へたる最も美はしき稱讚なりき。良しさらば、吾等亦暫らく是れを性慾と名づけむ。

何ぞ其の祝福を讚美せざる

吾等をして自然の兒の如く語らしめよ。自然の兒には常に兩面の刃あり。人は何故に其の害毒を呪詛して其の祝福を讚美せざる。

性慾の動くところ

吾等をして自然の兒の如く語らしめよ。夫の性慾の發動の醇なるものは實にこれ天下の至美、人生の至樂也。性慾無きところに人生幾何の價値ありや。吾等まことにそれを疑ふ也。彼等に詩ありや、愛ありや、將た美ありや。青春の妙樂、彼等暴してそれを解するや。吾等まことにそれを疑ふ也。たとへば一脈の春風吹き互りて野に生色あるが如く、たとへば微妙の音樂に神往きて限りなき歡喜の中に漂ふが如く、たとへば妙香薫じ、天華の雨に中る身は無上淨樂の三昧に入るが如く、性慾の動くところ野には春色あり、空には妙光あり、人には愛情あり、天地と人生と茲に初めて美なるを得るに非ずや。

地獄の火印を烙けられたるもの

夫の春と年若きとを飲ぶ人は、何ぞ性慾の美はしきを稱へざる。吾等をして自然の兒の如く語らしめよ。彼の性慾を禁遏し、若しくは力めて卑下するもの、其の面に色無く、其の眼に光無きを見ずや。さながら地獄の火印を烙けられたるもの如く、其の額には蛇の如き皺あるを見ずや。彼等笑はざるに非ず、されど其の笑ふ聲に空洞の響あるを聞かずや。彼は實



に知博く、徳高く、行ひ正しく、若しくは財裕かなる人なるべし。されど吾等は疑ふ、是の如くにして世に尙ほ望むべき榮えありや。人は己れに克つと謂ふ、されど性を矯むるは天を傷くる也。善か悪か、吾れ是れを知らず、ただ人生の福祉、是の如くにして空しかるべきを想ふのみ。玉の盃の底なきもの、けに用ふべからざるを如何。

性慾の醇化

けに慾也、飽き足らずむば已まざるべし。されど、喩へば火は煖むれども觸るゝものを燒くが如く、樂は遠きにありて聞くべきが如く、色は水に和して染むべきが如く、性慾の美はた其の飽足せられたる所に在らずして、それを憧憬するところに存すべし。吾等假りに性を慾の醇化と名づけむ。

久しい哉自ら欺けることや

吾等をして自然の兒の如く語らしめよ。是の如きをしも賤しむべしとせば、世に何の貴む

べきものありや。名づけて色情と呼ぶ可。淫慾と稱する、亦妨げじ。唯是れをしも恥とせば、世に何の誇るべきものありや。異世他界の知識をだも、人は尙ほ貴しとして求むるに非ずや、この自然の欲求を羞恥として忌避するの謂はれ何處にありや。けに没趣味、没風韻の世とはなりにけり。されど人は其の根を艾りて其の花の美はしきを望むべきに非ざるべし。久しいかな、風俗社會の自ら欺くことや。

價值也、名目に非ざる也

吾等は想ふ、若き女は容つくるべきもの也。何ぞ今の女學生の其の髮、蓬の如くなるや。かの裸體畫を眺むるもの、何故に其の膚の柔らかにして其の息の香ばしきを想ふべからざる乎。劣情と云ひ、實感と叫ぶ、暫く人の名づくるに任せむ。吾等自然の兒の關はる所は、價值也、名目に非ざる也。

眞の教育、眞の道德



嗚呼、自然の最も大いなる資は久しく磨かれずして埋れたり、是れまさしくまことの教育と、まことの道德との關はるべき最も大いなる問題に非ざる乎。人は長へに其の罪を遂ぐべきに非ざる也。

(明治三十四年十二月)

### 中江兆民居士

○去月中旬、中江兆民居士遂に逝きぬ。人の壽は歲月に非ずして事業にあり。五十年は居士にとりて決して短き生命に非ず。遮莫、吾人の最も居士に欽する所は、性命の外に超然として其の末日の平和の極めて美はしきにあり。居士夫れ那邊よりは是の赤心の地盤を得來りたる。

○理を言はば、死は爾かく怖るべきものに非ざるべし。吾人は既に百歳の過去に生れざるを悲しまず、何ぞ獨り百歳の未來に活きざるを恨みむや。死怖るべしとは何の謂ぞ。

○生死は常に處を異にし、長へに接觸するの期無し。吾人死せむ乎、既に生きざる也。吾

人生きむ乎、未だ死せざる也。生者にして死を恐るゝは、死者にして生を欲すると一般、能はざるを望むものに非ずや。

○想ふに、怖るべきは死其者よりも死を期待する心に存すべし。然れども既に死を知らず又何ぞ死の怖るべきを知らむ、知らずして徒らに憂悶す、畢竟迷妄ならむのみ。

○假りに古の勇者を墳墓の中より起して而して問へ。彼れ其の平和なる永眠を捨て、再び是の濁世に出でて戦はむことを望むべきか。

○天下の最も怖るべきものは不能死の觀念に過ぐるは無し。百年、千年、萬年、而して猶ほ死する能はずして長へに是の世界に生息せざるべからざるの運命を得たりとせよ。誰か慄然として寒心せざらむや。吾人は人生の最も大いなる幸ひは其の生命の不朽ならざる事に存すと謂はむ。

○生の覺悟は即ち死の覺悟也、哲學宗教は死の學問也。是の人生の一大事因縁に關して爲すあるに非ずむば、一切の道教學智、吾人に於て何爲るものぞ。吾人は是の點に於て兆民居士を大なりとす。



### 道學先生の理想的人物

今の道學先生の理想的人物となる、易々たるのみ。人に遇ふて説く所、徳教振作の論に非ざれば則ち風俗改良の談。讀む所の書は教育倫理、書く所の書は教育倫理、書く所の文は言文一致、夢にも風流韻事を語らず。時に豚を煮て晚酌三杯、興大いに到れば則ち公德唱歌を歌ふ。唯、夫れ是の如くにせば可ならむのみ。

### 教科大學

教科大學の設立を説くものあり。曰く、以て宗教の頽廢を救治せむと。誤れる哉。學説によりて信仰を求む、野に行いて魚を探るが如けむのみ。今の宗教界に要するものは知解以上の人物也。學説文字は既に、其の多きに勝へず。

若し夫れ教學研究の爲に一大學を起すが如きは、寧ろ閑事業と謂ふべし。歐洲大學に神學科あるは、中世四科法の遺物のみ。移して則とするの謂はれ無きや論無し。(明治卅五年二月)

### 麵包の比較研究

今の時、宗教學者ありて宗教家無し。所謂佛教の比較研究の如き、學術の爲には喜ぶべきも、宗教其物と何の關はる所ぞ、飢えたるもの求むるは麵包也、麵包の比較研究には非ざる也。

### 迷信と眞信

數人の迷信を説くを聞く、然れども吾人は疑ふ、世果して迷信なるものありや。又果して迷信ならざるものありやと。

信ぜざる者より見れば、一切の信仰悉く迷信のみ。信する者より見れば、一切の信仰是れ眞信のみ。半僧坊、穴守稻荷、成田不動、阿吽波羅婆等の崇拜を以て迷信とし、佛教、耶穌教の信仰を以て眞信なりとするが如きは、是れ對峙的名目の争のみ。彼此、處を換ゆれば迷眞も亦名を異にせむ。



世人動もすれば合理的信仰を謂ふ、誤れり。既に信仰と云ふ、豈合理的なるものあらむや。若しあらば、是れ最早や信仰に非ざる也。

信仰は元始的事實也。眞偽なく、是非なく、上下なく、優劣なし。偶、是れありとするも方便的稱謂に過ぎざるのみ。

麵包を求めて石を得たり

吾人は靈性の安慰の爲に宗教を要す、而して今の學者與ふる所は宗教の學説のみ。吾人は理性の平和の爲に哲學を求む、而して今の學者供ふる所は哲學の歴史と認識論とのみ。吾人は吾人の人格の修養の爲に道德を要む、而して今の學者の訓ふる所は倫理學の理論のみ。米を求めて砂を得たり、麵包を求めて石を得たり。嗚呼夫れ飢えたるものを如何せむや。

先づ人たらむことを要す

今の學者、口ありて手無く、言説ありて實行なし。畢竟、識の貴きを知りて人生の更に重

んすべきを解せざるの弊に坐す。

學者たる可也、然れども先づ人たらむことを要す。然らざれば萬千の知解も半錢の價值無けむ。

年若き人よ

年若き宗教家よ、爾かく世を果敢なむこと勿れ。善く食ひ善く飲む、是れ人生の事實に非ずや。

年若き哲學者よ、爾かく世を難する勿れ。理の争ふべきもの、初めより争はざれ。吾人は美酒に對して先づ其の泡を吹くに非ずや。

年若き教育家よ、爾かく吾人の言に眉を擧むる勿れ。罪無きものは恐れず、恐るゝものは疚しければ也。人は焼かれむことを慮りて其の火を怖るべきに非ざるをや。

年若き道學先生よ、爾かく善惡を以て心を勞せざれ。かの流沙に沈むものを見よ、自己の叫びの爲に自ら溺るゝに非ずや。



事後の註釋、理前の是認

人よ、何ぞ汝の争を止めざる。古より趣味に争ひ無しと稱せらる、されど吾人の人生は趣味の争に外ならざるに非ずや。

理論は事後の註釋のみ、事實は既に理前に於て是認せられあるを知らずや。

祭典の意義を知らずや

我國民は祭禮を好む。然れども、其の何の爲の祭禮なるかを知らざるもの多し。大祭日の如きも、天長節、紀元節、孝明天皇祭等を外にして、其の祝すべきの意義を知るもの極めて稀なるべし。彼等はたゞ、業を休み、爲す事も無くして、一日を遊び暮らす特權あるを以て、祭日を祝すべしと思惟せるならむ。

怯夫に非ざれば即ち僞人

人性は圓滿なるものに非ず。吾人今にして神たらむは早からずや。

強ひて違はざるを求め、力めて戻らざらむを銜ふも、省みて安からず。即ち性を殺して、匿に自ら欺く。是れ怯夫に非ざれば、是れ僞人。

今の卅の學者概ね是の類のみ、何ぞ其の云爲の死灰枯木の如くなるを怪しまむや。

單に一個の頭顱を有するの故に

道學先生怒つて曰く、吾等は神の前に平等也、汝獨り天才を擧ぐ、是れ人の子を賊する者と。然れども「神は既に死にぬ」、吾人は凡俗の前にも尙ほ平等ならざるべからざる乎。平等主義は頭數主義のみ。然れども吾人の釋迦、基督、日蓮、奈破翁が、權兵衛、太郎兵衛、乃至道學先生と同じく單に一個の頭顱を有するの故を以て、共に同じく一個の投票權を有するが如きは、吾人の勝へ得る所に非ざる也。

醜なる哉東京市



山青く水清らなる是のみ國に、吾等の首府の如何なれば斯くは汚れたる。

そこに立てる棟三十萬、何處に聖者の息ふべき家ありや。形歪みて色けがれ、飾り卑しくして式整はず、吾れはむしろ敗家の群の尙ほ美しきを思ふ。其の路を見よ、雨ふれば泥深く、風吹けば塵揚り、馬糞巷にうづたかし。墳の隠れたるを歩むにも似たらすや。路行く人を見よ、其の面の物欲しけならざるありや。色あせて眉擧み、其の眼には偷盜の如き光あり。天の青きを仰がむと欲すれば、空に電線のかゝれるあり。月の夜の清きを眺めむと欲すれば、地にうつる影尙ほ人間の燈に汚さる。鳥は來鳴かず、花咲き匂はず、耳をそばだつれば唯、罪惡の響を聞くのみ。

あゝ山青く水清らなるこのみ國に、如何なれば吾等の首府は斯くは汚れたる。醜なる哉、東京市。

以上(明治三十五年一月)

### 現代思想界に對する吾人の要求

一 宗教家、哲學者、教育倫理學者の一讀を煩はす

古の人訓へて曰く、汝等求めよ、然らば與へられむ、尋ねよ、然らば遇はむ、叩けよ、然らば啓かれむ、是れ信仰なりと。吾人は不幸にして現代に對して多くの信仰を有する者に非ず。或は其言の荒野に叫ぶものの如く空しく消え去らむを恐ると雖も、而も一片耿々の微志黙して而して已むべきに非ざるを覺ゆ。希くは今の宗教家、哲學者、教育倫理學者をして暫く吾人の歎求に聽くところあらしめよ。

### 二

吾人熟、現代思想の趨勢を考ふるに、言説徒らに煩はしくして實行の見るべきもの少く、



理義日に多端に流れて、事證は則ち藐焉たり。博學多識の學士は雲の如しと雖も、其の會して談ずる所を聞けば恍として隔世の事に似たり。萬卷の書は庫に満ちて學徒是れに附くこと菌の如しと雖も、年々市に遍ねきの著書、何れか活ける人生の知識を與ふるものぞ。抑、吾人にとりて最も大いなる疑問は人生にあらずや。吾人はそれが爲に悩み、それが爲に苦しむ、それが爲に輾轉して慟哭す、あらゆる徳業と罪惡と功利と教學と、實に是の疑問の解釋の爲に世に現はれたるに非ずや。今の時は文明の世と稱せらる。釋迦、孔子、基督、日蓮だも恐らく夢想し能はざりし工業と學術とは、燦として是の文明を裝飾せり。然れども吾人の心靈はそれが爲に何等の希望と安慰とを得たりしとするぞ。思ふて茲に至れば、吾人は惆悵として嘆嗟せざるを得ざる也。

宗教、哲學、教育、道徳、是の四つのもは吾人の精神的生活に關して最も重大なる職能を有するものたり。世に處して誤らず、道に安んじて迷はざらしむるものは道徳也。觀心自證の上は人物修養の道を啓くものは教育也。物心二界の交渉を明にして吾人の理性に平和を與ふるものは哲學也。若し夫れ人間靈性の無限なる歎求に應へ、理義會通の境域を離れて無

上超絶の眞理を示現し、吾人の精神的生活に最高の希望と安慰とを與ふるもの、是れを宗教と爲す。

吾人は敢て現代の思想界に向つて問はむと欲す、この四つのも、今の時に於て果して其の職能を全うしつゝありや。今の所謂宗教家、哲學者、教育倫理學者等は果して是の職能の爲に盡力しつゝありや。吾人は二千年の歴史を犠牲となせる今の文明に向つて人生の解釋を要求するは、吾人にとりて正當の權利なりと思惟す。現代の思想界は果して是の要求を満たしつゝある乎。吾人の見る所を以てすれば、文明とは鐵と石炭との利用の謂のみに非ざる也、辯論解析の煩瑣の謂のみに非ざる也。苟も吾人の靈性に確實なる安慰と豊富なる希望とを與ふるものに非ずむば、一切の道徳、學智、吾人に於て何爲るものぞ。今の思想界は、果して是の點に於て吾等に何等の満足と與へつゝありや。是の如きは、恐らくは陳套の疑問ならむ、而も現代の思想界に向つて其の事實的解釋を促がすべき疑問としては、緊急切當、是の如きはあらざる也。



今日の宗教が宗教として何等の威嚴、何等の勢力をも有せざるは、最も明なる事實也。人間靈性の司配者を有せざる是の不幸なる時代に生れたる吾人は、既に種々の形式に於て是の深大なる憂悶を想へたり。新道德、新宗教に對する多年の歎求は即ち是の憂悶の發聲に外ならざるなり。而して我が思想界は何を以て是の歎求に應へたるか。天下の學者は、國民の爲め、社會の爲めと稱して争ふて其の意見を公にせり。然れども是れ唯、學說のみ、意見のみ、理以て争ふべく、辯以て析くべし、人生一大事縁の覺悟に關して何等の光明を投ずるものに非ざりき。吾人の求むる所のものは信仰也、而して彼等は信仰の歴史と性質とを説けるのみ。餓えたるものは麵包を得ずして、却て麵包の説明を得たり、而して彼等は以て吾人の飢渴を救ふべしと爲す也。

吾人は現今第一流の思想家中、當來の宗教に對して熱心なる考察に従事しつゝある多くの學者あるを認む。兩井上博士、元良、加藤、村上、諸博士の如き是れ也。諸氏が其の宏博深

遠なる學識によりて一世を指導せられむとするは、國民の宜しく感謝の意を表すべき所なるべし。然れども吾人をして忌憚なく言はしめば、諸氏の關する所は學說のみ、而して學說と信仰とは本來別種の事項に屬す。理義の考覈、辯析の精微によりて活ける宗教を造り得べしとは吾人の思惟し能はざる所也。學術上の研究として、諸氏の事業が本邦の學界に寄與する所の少ならずるべきは素より疑ひを容れずと雖も、而も諸氏が是れによりて或は本邦將來の宗教を建設し得べしとの抱負を懐けるあらむ乎。吾人は遺憾ながら諸氏の志望に信賴する能はざる也。井上、元良、加藤、諸博士の如きは、學者にして宗教家に非ず。學者の態度に據りて宗教を論議する、素より其の所なるべし。而も本來僧籍にありて德望一世に高かりし村上專精氏が、其の宗教家の本分に遠ざかりて、等しく學究的態度を取るに至りたるの一事は、吾人の深く遺憾とする所也。一昨三十三年の春、釋尊降誕會に於ける氏の演説は、今尙ほ吾人の耳にあり。其の東本願寺の腐敗を慨嘆し、一代民心の教化は最早や是の如き腐敗を極めたる形式的宗門に依頼すべからざるを道破し、仰いで一大偉人の是の濁世に出でて新信仰の福音を鼓吹するものあらむ事を歎求せしは、正に現代民衆の希望を言ひ盡せるものなりき。



吾人は當時に於て深く望みを氏の虔誠熱烈なる宗教心に屬し、自ら釋尊付屬の行者を以て任すべき者、或は是の人に非ざるかを思ひたりき。嗚呼、吾人の希望は一片の空想に過ぎざりし事、今や漸く明ならむとする也。村上氏は吾人の妄りに思惟せし如く宗教家に非ずして宗教學者なりき。氏は井上、元良、加藤諸博士と共に、言論談理によりて信仰を求めむとする人なりき。我邦の學界は氏によりて或は有力なる一學者を獲たらむ、是れ賀すべき也。然れども、あ、是れ吾人民衆の要求と抑、何の關はる所ぞや。

四

去年十月、村上氏は眞宗大谷派の僧籍を脱するの告白書を天下に公にせり。其の理由とする所は、一宗派の僧侶たることは、氏が従事しつゝある佛教研究の態度を維持する事と相容れざるが爲なりと謂ふにあり。氏が所謂佛教研究の態度とは、古代印度に於ける婆藪槃豆氏及び訶梨跋摩氏が俱舍論并に成實論を著はししが如く、一宗一派の私心を去りて公平無私に佛教を研究し、各宗教理の根柢を貫通せる共同の理想を統一し、以て佛教の眞精神を發揮

するにあり。而して氏は是の研究を以て今の廢頽滅亡に近づきつゝある佛教を興隆する唯一の方法となし、是の研究の一結果たる佛教大綱論が舊思想者に容れられざるべきこと、猶ほ法然の撰擇集が、明惠、公胤等の誹謗を受けしが如くなるべしとなし、而も宗教全體の爲を思ふ者の、古より保守者流の反對を預期すべきこと、猶ほ傳教、弘法、法然、日蓮の如くなるべしと説き、以て氏の態度が舊佛教徒の反抗に遭遇すべきを予想せり。

一宗教學者として是れを見れば、村上氏の態度は實に歎賞に餘りありと謂ふべし。然れども吾人敢て斷言せむ、是の如きは決して宗教家の態度に非ざる也。佛教の批評的は比較的、研究や、ただ好し、唯、是れによりて新信仰を求めむとすとは何の謂ひぞ。信仰は生命也、解析によりて求むべきに非ず。證悟也、談義によりて達すべきに非ず。感情也、論理によりて解すべきに非ず。觀心自得の修證ありて、茲に初めて理義會通の人に語るべきものあらむのみ。理によりて情を強ゆる、是れ僞情也。論を借りて信を迫る、是れ僞信也。吾人の要求する宗教と毫も爲す所無し。古より學理研究の結果として一宗教の建設せられたる事例は、吾人の未だ曾て知らざる所也。村上氏は法然、日蓮を援引せり、然れども法然の淨土門が撰擇



集によりて開かれ、日蓮の法華宗が開目鈔によりて建てられたりとは、吾人の思惟する能はざる所也。けに捨閉開抛と云ひ、一向專修と云ふ、素より淨土一門の關鑰たり、特に九條關白の付屬を待つて知れたるに非ず。法華折伏と云ひ、一念三千と云ふ、正に是れ妙宗立脚の元意、豈佐渡流竄の日に始まらむや。法然、日蓮、既に立教の當初に於て是の理を唱へたりき。然れども是の理ありて初めて淨土門あり法華宗ありきとは吾人の決して信する能はざる所也。凡そ信仰の祕密は健宇感應の一大事縁に屬す、悟るべくして言ふべからず、理義文字はたまく、其の外面の形相を解釋するに過ぎざるのみ。是を以て眞正の信仰は、常に理解に先だつ、理論の結果初めて信仰あるに非ず。古より宗教の創立が多く預言、天啓、默示に起原し一切人智の究明を超越するは實に是れが爲にあらざるや。吾人は固く信す、淨土念佛宗と本化妙宗とは畢竟一個の元始的事實也、法然、日蓮の偉大なる人物の上に感宇應受せられたる一個の宗教的祕密也。而して撰擇集と開目鈔とは是の事後の註釋たるに過ぎざるのみ。村上氏が氏の所謂批評的研究の態度によりて是の二人の事蹟に倣ひ得たりとするもの如きは、吾人の解する能はざる所也。

されば村上氏の所謂批評的研究の如きは、宗教の立場より見れば畢竟閑事業のみ。其の興廢汚隆と何等著大の關係を有せざるのみと謂ふべし。村上氏が是を以て佛教從來の研究に一生面を拓かむと言ふや可し、是れによりて佛教其物の類廢を振興し、世道人心の腐敗を救済せむと言ふが如きは、吾人の得て信する所に非ざる也。畢竟、氏は學說によりて信仰を求めむとするもの、嗚呼是れ木に緣りて魚を求むるものに非ずや。

讀者よ、吾人が村上氏を以て爾かく言を爲す所以を怪しむ勿れ。吾人は現代思想界の惡風潮が、誠虔摯實なる好個の宗教家村上氏其人の如きをすら、尙ほ數十年來の名譽ある僧籍を抛ちてまでも冷靜枯淡なる一學究に化せしめむとするの事實を見て、痛恨悲惋の思ひに堪へざるものあれば也。吾人は毫も村上氏を批難せむとするものに非ず。氏によりて博學達識なる宗教學者を得たるは、我が學界の爲に喜ぶ所也。然れども學界の喜びは吾人民衆の福祉と何の關はる所ぞ。飢えたるものにとりて望ましきものは麵包也、麵包の比較研究に非ざる也。

五



吾人民衆の歎求の願みられざるは、嘗り宗教界に於てのみに非ざる也。

吾人は理性の平和の爲に哲學を要す、而して今の世の學者の與ふるものは哲學其物に非ずして哲學の歴史也。彼等訓へて曰く、汝等過去を知らざれば則ち現在を知る事能はずと。其れ或は然らむ、されど麵包を食ふに先だちて其の麵包の製法を知らざるべからずとせば、夫の飢えたるものを如何せむや。良し暫く彼等の訓ふる所に隨はむ、而も哲學史に通曉せりと稱する幾多の學者の中、一人の自家の哲學を吾人に教ふるもの無きは何ぞや。假令ひ過去幾千年の思想を了するも、そが吾人が現在の要求に應ずるものに非ざらむか、吾人民衆に於て何の徳とする所ぞ。吾人の邦は希臘に非ず、獨逸に非ず、吾人の世の中は中世に非ず、十八世紀に非ず、夫の野に耕すものは尙ほ吾人の食を作り、夫の家に紡ぐもの尙ほ吾人の衣を織る。何ぞかの學者輩の空閑にして獨り世と爲す無きの甚だしきや。吾人遂に恨み無きを得ざる也。

吾人は、全く人を造らむが爲に教育家を要す。而して今の思想界は唯、教育學者を供ふるのみ。彼等訓へて曰く、教育學を知らずむば教育家たる能はずと。願くは謹んで教を受けむ。

然れども希臘、羅馬の教育史を知らずむば現代の教育に與かる能はざる乎、兒童心理學の知識を離れては兒童の教育は爲され能はざる乎。所謂教育學訓ふる所の教授の形式と謂ひ、段階と謂ひ、訓練と謂ふ、素より須要の知識に屬せむ。而も教育其物は知解に非ずして實行也、才智學識とおのづから別種の事縁に屬するなからむや。吾人は今の世に於て教育學者の寧ろ多きに過ぎて而して教育家其人の甚だ少きに過ぐるを憂ふ。夫の白面の書生、ラインを唱へ、井ルマンを稱し、ベルゲマンを説くもの、世の所謂教育學者に非ずや。而して彼等如何ばかり人生を解せりとするぞ。文字を以て記るされたる知識の多くは是れ形式のみ、符號のみ、是れを註解義譯するものは人生也。彼等果して是の人生の上に鏤刻せられたる大文字を色讀し得たりしか。夫の且に學校を出でて夕に人に教へ、漫りに先哲の名義を列ね、恣に外人の所説を抽き、觀心自得の工夫なくして徒らに稱陳是非を喋々するもの、吾人を以て見れば殆ど無意義の閑事業のみ。かゝる輕浮の輩をして事に教育に當らしむ、人の子を賦ふ無くむば幸ひ也。畢竟吾人民衆の要するものは、教育其物にして教育學に非ず、教育家其人にして教育學者に非ず。若し空論臆説の流行を以て教育の盛大をトすべくむば、今の世の如き



は蓋し教育の全盛時代ならむ。唯、教育其物の實効、索然として擧らず、世道人心、日に頽廢に趨きつゝある恐るべき現前の事實は、何處にか其の解釋を求むべき。吾人は今の思想界に向つて三思を促さざるを得ざる也。

六

吾人の要求の顧みられざるは當り宗教、哲學、教育のみに非ざる也。吾人は今の所謂道學先生に向つて吾人の苦衷を披瀝せざるべからず。

今の思想界に倫理道德の學者程多きは無く、倫理道德の著書程夥しきは無く、倫理道德の學會程繁きは無し。學校とし云ふあらゆる學校は、男女長幼の別無く、其の高等學校たると中小學校たるとを論ぜず、商工業、醫術の専門學校たると、將た音樂、美術の學校たるとを問はず、悉く皆倫理修身科の備へあらざるは無し。地方の教育者が毎年開催する所の夏期講習會に於て、最も多く歡迎せらるゝものも亦倫理修身の學者也。倫理修身の事は日常の生活と最も密接の關係を有す、そが一般社會の感興を惹起するの爾かく大いなる、素より深く督

しむに足らざるべし。然れども吾人をして問はしめよ、今の世の所謂倫理修身とは果して如何なる事ぞ、倫理修身の學者とは果して如何なる人ぞ、と。

吾人は身久しく學界に生息せるもの、教育社會の現狀に就ては、其の觀察恐らくは大過無きを信ずる也。而して吾人の見る所によれば、今の所謂倫理修身とは、倫理に關する理論學說の謂にして、道德其物の事本の謂にあらず。今の學者が是れを校舎に説き、學會に講ずるや、唯、是れ理のみ、論のみ。或は倫理學說の異同を述べ、或は道德意識の發達を説き、或は徳名の品彙稱謂を論じ、以て彼等の所謂倫理修身の趣旨を得たりとするもの如し。而して斯かる倫理修身の學者は如何の人ぞと見れば、多くは是れ白面書齋裡の學士のみ。德行操持の人に勝れたるものあるに非ず、令名佳聞の世に仰がるゝものあるに非ず、たゞ、西洋倫理學の知識に於て多少常人に超ゆるあるのみ。嗚呼、是の如き人をして是の如き事業に當らしめ、以て徳教振作の大事を成さむとす、天下何物の突梯か能く是れに如かむや。

夫れ道德の事たる、言ひ難く説き難し、唯、一事の争ふべからざるは、そが觀心修證を以て第一義と爲すこと也。觀心修證の事、固と自得、理以て推すべからず、辯以て強ゆべからず、



要は健孚感應の不可思議と謂ふの外無し。如何にして是の不可思議を現じ得べきやは、やがて教育者、倫理學者等の研究すべき一大問題なりとす。然れば是の問題は古より満足に解決せられずして今日に及び、今日以後も恐らくは解決せらるゝの時期無かるべし。而も一事の争ふべからざるは、道德の感化が其の人に在りて其の法に存せざる事也。吾人は決して一切の道教學智を擧げて道德上無用なりとするものに非ずと雖も、其の元始動力が知識以上の或者なることを以て争ふべからざる事實なりと信じ、而して同時に是の或者が多くの場合に於て所謂人物の感化に由來することを認むるもの也。吾人は是の點に關して多言するの邊無し、唯、是れを古賢先哲の遺業に鑑み、吾人自らの證悟に省みて敢て是の如く信すと云ふを以て足れりとせむ。たゞ見よ、釋迦、基督、日蓮の教は古今を通じて渝らず、其の道の獨り汚隆あるは如何。孔子の教は論語十卷の外に出でざるべし、而れども誰か孔子自らの口より其の教を聞くことの、猶ほ獨り其の書を読むが如けむと言ふものぞ。大奈翁の下には幾個の小奈翁あり、大藤樹の下には幾個の小藤樹ありき。其の書にして能く其の道を述べ、其の文にして能く其の神を傳ふべくむば、今の道學先生の門下にも幾多の賢哲あるべし。否、道學

先生自らの如きは實に大賢先哲を凌駕せる大人物となり居らざるべからず。吾人をして忌憚なく言はしめば、今の社會、殊に教育社會が、必ず倫理學の書齋先生に託して道德修身の大事に當らしむるは、實に謂はれ無きの甚しきものと謂はざるべからず。道德其物を要する者に向つて倫理學説を講ずるは、是れ米を求むるものに石を與ふるものに非ずや。人物の修養を望み、觀心自得を希ふものを動かすに區々たる理義辯口の末義を以てするは、吾人其の何の故なるを解せず。徳教の爲の倫理學は植物學の如く講義し若しくは領得せらるべきものに非ず。夫の多少西洋倫理學の著書を読みたりと謂ふの外、何等常人に異なる無き白面近眼の書齋的道學先生をして、靈性化導の人生一大事緣に關はらしむるが如きは、偶、現代思想界の一缺點を暴露せるものと謂ふべし。夫れ唯、倫理學説の講義あるのみにして而して道德の感化なく、倫理學説のみありて德行家無し。世を擧げて倫理修身を叫ぶも名教地を掃ひ、社會公私の腐敗日に益、甚しからむとするもの、毫も怪しむに足らざるを見る也。



讀者よ、吾人をして徒らに現代を誹謗するものと爲す勿れ。吾人は靈性の安慰の爲に宗教を要し、理性の平和の爲に哲學を要し、人格の修養の爲に教育、道徳を要す。是れ豈最も簡明なる人性本然の要求に非ずや。而して今の思想界は宗教の代りに宗教の學説を與へ、哲學の代りに哲學の歴史を與へ、教育道徳の代りに教育、倫理の理論を與ふ。而も求むるものは遂に與へられざる也。二十世紀の文明とは、是の如く人性本然の要求を無視するものなる乎。吾人は敢て現代の思想界に向つて、其の進路を誤れることを警告せむ。吾人の見る所を以てすれば、今の學者の多くは器にして人に非ざる也、能力にして人物に非ざる也。吾人は學者の名譽を是認す、然れども吾人は學者となるの前に先づ人たることを要するに非ずや。人として缺くる所あるの學者は、學術を知りて人生を解せず、一切の道教學智を擧げて自家書齋裡のものとなさむとす。あらゆる偽學は、是の如くにして世に起り、理義日に多端にして收拾する所を知らず、顧みて人生の歸趣に關しては、茫然として與ふる所無し。本邦現代の思想界は即ち其の好事例にあらずや。

是れを要するに、あらゆる人生の問題を藐視せる今の學者の學究的態度は、吾人の毫も徳

とする所に非ず。吾人は、今の思想界が吾人民衆の歎求に應じて改造せらるゝの時一日も早からむことを希望する者也。畢竟今の時、要するものは學者に非ずして實行家也。宗教の方面に於ても、哲學教育、道徳の方面に於ても、人生に對して統一的解釋を與ふるの實行家也。觀心自覺の上に立脚せる意力あり情熱ある實行家也。口耳三寸の學の如きは、今の學者先生をして關はらしめよ、人生は知識にあらずして事實也。吾人が靈性の安慰と希望とは是の事實の解釋の上に繋れり。吾人は是の事實を色讀し、身現し、其の大なる人格の爲によりて吾人が本心の證悟を促がす程の一大實行家の出でむことを望む者也。

嗚呼、吾人は求めたり、然れども與へられざる也。尋ねたり、然れども遇はざる也。叩きたり、然れども啓かれざる也。吾人民衆の歎求は遂に荒野に叫べるもの如くなるべき乎。昔者基督の教を説くや、エルサレムの民皆駭きて曰く、この人は學士の如くならず、權威を有てるものの如く教へ給ふと。嗚呼今の時、誰か吾人に權威を有てるもの如く教ふるものぞや。



坪内氏の自意識論

自意識の過度を以て時代精神の痼疾となすは、坪内博士が年來の宿論、近時當來の娛樂を論ずるの主旨も亦是に本づく。吾人の首肯し難き所也。

如何なる場合に於ても、自己が存在の意識を離れて人生の幸福を求め得べしとは吾人の思料し能はざるところ、所謂忘我と云ふもの、亦是の意識との對比を離れては其の淨樂を現じ得べしとは想はれず。若し夫れ深刻なる自意識が、時にいはゆる個人主義に幸ひするの故を以て、社會道德の見地より是れを排斥するが如きは、素より取るに足らざるの俗論のみ。然れども、坪内氏と吾人と、互に其の立脚の地盤を異にせり。理を争ふも、固より益するところ無けむ。

古き眞理

年若き人よ、如何なれば是の麗はしき春の日を尙も名利の巻に走り暮さむとはするぞ。さらばこの涙の谷に住みながら尙ほ愁ひの泉、底淺しと呷かたむとや。

まことに、是れ古き眞理也。されど春風年ごとに面を吹く毎に、人は乃ち老ゆるを如何せむ。聲あるものよ、何ぞ歌はざる。歌ひ得べき日は此世に幾何もなきぞかし。口あるものよ、何ぞ飲まざるや。酒杯に對して漫りに其の泡を吹く勿れ、其の泡の消えざる前に汝の命の終りを告げざることを誰か保し得るや。

年若き人よ、胸に青春の炎を宿するもの、口に道義を説いて何かせむ。炎は他を焚かずむば自らを焚かむのみ。其の髪尙ほ緑にして、其の心死灰の如くならむは醜くからずや。

法則と生命

新しき聲の最早や響かずなりたる時、人は死語の中より所謂法則なるものを造り出だす。是れを以ての故也、所謂法則の榮ある處、そこには必ず生命の死滅あるは！



吾人の理想

吾人に三つの理想あり、一に曰く完全なる性慾。二に曰く安眠。三に曰く平和。唯、是れのみ、あ、唯、是れのみ。

永き戀、早き死

此の生の憂苦を免るゝの道、たゞ三つあり。永き戀か、早き死か、然らざれば狂。あ、吾人は孰れを擇ばざるべからざる乎。

イゴイスト

人あり、吾人に言つて曰く、予はイゴイスト也。是の活き甲斐もなき生を享けながら、何の違ありてか人の爲にし世の爲にせむ。是の如きは世の謂はゆる悪人ならむ、然れども予は予自らの善人なれば則ち足ると。

吾人聞いて答ふるところを知らず。唯、憮然として僅に點頭けるのみ。

裸體の盛裝

今の所謂道徳が、方便、形式、慣習を離れて如何ばかり個人が中心の要求に應ずるものなるかを檢覈するは、吾人の見て現下の急務とする所也。  
人々各、自己の意識に點火して靈性の聲に聽くところあれ。昔者裸體にして盛裝せりと想へる一人の王ありき。王の愚は可し、裸體を觀て尙ほ齊しく其の盛裝を讚美せる群臣百姓に至りては忍ぶべからざる也。あ、人は何時まで自ら欺かざるべからざる乎。

己れの立てるところ

哲人教へて曰く、己れの立てるところを深く掘れ、其處には必ず泉あらむ。自らの心の中に求むるところあれよ。世は即ち汝のものならむ。

然れども悲しき哉。多くの人は己れの立てるところを知らず。何處に自らの心を求むべき



やも覺らざる也。

グリーンと道學先生

西晋一郎氏、グリーンの「倫理學入門」を翻して近時の好譯述と稱せらる。あ、グリーンを譯する者は是れあり、グリーンの如き人は何處にある。

道學先生と雖も、ハンフレード女史に「ロバート・エルスマア」の著ありしことは聞き及べるなるべし。是の小説の主人公たるロバートの師、ヘンリーグレーは實にグリーン其人を描寫せるものなりと云ふに非ずや。オクスフォード大學に於ける彼の感化は、其の講筵に於けるよりも寧ろ其の人物にありき。新舊信仰の變遷時代に際して、思想界の木鐸となり、能く一世傍疑の風潮に卓立して、殊に青年學生の指導者となれる彼の如きは、眞に古の哲人に近しと謂ふべし。彼の感化によりて其の舊信仰を失ひたるロバートは、復び彼の影護によりて其の新信仰を求むるを得たり。彼れは今の道學先生の如く朝夕道義を講ずるを

以上(明治三十五年五月)

職業とするものに非ず。彼れ自らの身讀し體達したるもの、おのづから外に現はれて所謂道義の説を成せるのみ。其説の由りて來る所、蓋し深重なりと謂ふべし。今の道學先生の知る所は「プロレゴメナ」にありてグリーンにあらず。漫りに口耳の擬似を事として其の人物の本來を見ず。口を開いて輒ち道と云ひ徳と云ふ。道德の事、何ぞ夫れ容易なるや。

(明治三十五年七月)

故大橋佐平氏

(大橋圖書館の開館に際して感あり)

吾人は故大橋佐平氏を大なりとする者也。其の富貴を論じ其の權勢を説かば、世間其人に乏しからざるべし。唯、其の人物の一徹にして其の事業に終始ある點に於て、吾人は氏に於て一個の眞人を見る。

三圓八十錢の家賃を以て其の商店を本郷弓町に開きしより、彼は一度びも其の信する所を



枉けざりき。内にありて、一心の是認に背かず、外に向つて文明の大勢に循ふもの、事業は必ず最終の勝利を收むべしとは、彼れの常に確信したる所なりき。彼は是の確信に本づき、疑懼なく、躊躇なく、斷々乎として其の欲する所を行ひたり。爾來十數年にして彼れの願ち得たる金錢の成功は、素より岩崎、三井の論に非ずと雖も、尙ほ一個人が其の赤手と信念と意志と勤勉とによりて得たる清淨なる資産としては、眞に敬服すべきものなりき。

然れども是れを社會に得たる利益は亦是れを社會に報ひざるべからず、とは彼れの平生の所志なりき。是に於て彼れをして書肆の主人たらしめたる同一の志願は、茲に彼れをして圖書館を設立して社會に寄與せしめたりき。蓋し十二萬五千圓は、岩崎、三井の資産より見れば殆ど零碎の高なるべしと雖も、彼は永く日本に於ける最も大いなる寄附者の一人たるを失はざるべし。彼れの事業は是に於てか始あり、又終りありと謂つべし。

是の如くにして彼は其の信する所を行ひ、爲さむと欲する所を爲して、靜に此世を去りぬ。終りに臨みて彼れの遺したる文書中に左の文字あり。

人は、天然界また人道界に於て自心を確立し、是の自心の爲に始終活動すべきものなり。

人は自心を堅固にすれば清淨極樂なるべき者也。

是れ取りも直さず彼れの一生によりて實現せられたる信念主義たる也。彼は是の信念と主義とを説くに、口を以てせずして身を以てせり。所謂身體達の旨義、是に至りて全しと謂ふべし。言説徒らに煩はしく、見思の惑ひ未だ去らざる吾人の如きもの、深く彼れに就て學ぶ所あるべき也。

(明治三十五年七月)



無題錄

◎讀賣紙上掲ぐるところの半古君の衣服改良案には、吾人一向感心せず、裁式煩瑣に過ぎ、形様甚だ散漫、毫も佳處ある無し。衣服は人生習慣の最も固着せるもの、而して習慣は凡ての勝利者也。是の習慣を維持するは、是の習慣を有する者にとりて是の上も無き衛生也。漫然空理を説いて積年の習慣を打破せむとす、事太だ難し。改良論者は深く是の點に着眼せむことを要す。

◎今の教育は人を造らずして徒らに手足を造る。其の卒業生は人を使役せずして却て人に使役せらる。畢竟門附けせしめむが爲に人の子に三味線を教ふるもの也、藝も是に至つて身を滅すもの多し。各學校の卒業期に際して、吾人切に是の感を深うせり。所謂教育家、果して何の辯かある。

◎基督教大舉傳道の結果頗る佳良なりと傳ふ。氣早やなる論者の中には、是の事實を以て人

心一轉の機會なりとなすものすらあり。逸まる勿れ、運動によりて得たるものは、何時運動によりて失はざるを保し難けむ。

◎人心の移るは幾微の間にあり、唯哲人のみ能く這般の消息を解す。

(明治三十四年八月)

◎近刊の「帝國文學」に現はれたる「危險なる學風」と題する時論こそ痛快の極みなれ。

ニーチエの所謂 Bildungspilister に充滿せる今の學界を罵倒して、語に風霜の氣あり。「嗚呼彼の倫理學者をして十八世紀に歸らしめ、彼の教育者をして獨逸に生れしめ、彼の歴史家をして徳川時代に生れしむるも、吾が國民は寸毫の損益する所なし」と放言するあたり、今の道學先生をして顔色なからしむ。

◎坪内博士の「英文學史」は、文學研究者にとりて最も有益にして趣味ある著述也。蓋し英文學は坪内氏が最も得意の壇場。儼然たる一部の證典として素より傍人の容物を許さず。今の學界に其の匹を求むれば、夫れ故大西氏の「哲學史」乎。英國詩人文人の名、徒らに傳はりて一の完全なる英文學史なき本邦文壇の缺陷は、是の書によりて見事に補充せらるゝを得



たりと謂ふべし。

(明治三十四年七月)

◎一たび文敵の扞發に遭ふてより、鐵幹の意氣、頗る沮喪せるもの如し、何ぞ其の小膽なるの太だしき。平生好んで劍と虎とを歌ふもの、是の小兒輩の惡戯、雲烟過眼視して可也。

◎一旦の誹詆に激して輒ち争ひを小兒輩に構ふ、事既に兒戯に類す。訴訟に敗れて遽々然として狼狽す、眞に笑ふべし。是の如くにして、詩人、心を安んずるの地何處にかある。好男子、惜しむらくは直に過ぎて爲すべきことを忘れたり。

◎「明星」載する所の鳳晶子の短歌、時に激賞の評を耳にすれども、吾人を以て見れば、餘りに氣取り過ぎて寧ろ氣障に近し。平板の思想を捉へて故らに其の字句を微遠にするの述ある、殊に厭ふべきを覺ゆ。

◎凡そ明星一派の詩、清新は嘉すべきも、輕浮は厭ふべし。人往々文壇の高襟黨を以て是れに擬せむとす、必ずしも當らざるに非ざるが如し、如何。

◎高襟黨はまた繪畫界にも是れあり。近時の文學雜誌に多く見るところの如きは、洋風の

皮相を學びて生吞活剝の醜態を顧みざるもの、蓋し高襟畫の最下等なるもの乎。

(明治三十四年八月)

◎近時豫約法によりて大部の書籍を出版するもの多きは甚だ喜ぶべし、殊に經濟雜誌社が從來是の方法によりて群書類從、人名字書、社會字彙、國史大系等を陸續刊行したるは我が學術社會の深く徳とする所也。今や國史大系の出版將に完成を告げむとするに臨みて、更に續國史大系の大出版に着手せり。斯學に貢獻する所少からずと謂ふべし。

◎吾人は茲に同社の事業を完全ならしめむが爲に、左に數條の戒告を與ふべし。是れ特に一經濟雜誌社の爲に言ふのみに非ず、當今豫約出版者の參考に資せむが爲なり。

◎既に豫約出版と謂ふ。其の當初の公約に違背する事有るべからざるは言ふまでも無し。然るに從來の所謂豫約出版の顛末を見るに、中には其の一部分を刊行したるのみにして中止せるものあり。往年哲學書院の計畫せし史料大觀の如きは是れ也。其の騙詐の所爲たるは素より言ふまでもなし。それ後人をして豫約出版其物を危疑するに至らしむるの罪、更に大なりとす。是の事先づ以て戒告せざるべからず。



◎假令豫定の書目を出版し了するとも、其の出版期日を誤るものも公約違反の責を負はざるべからず。素より大部出版の事なれば、一二月月位の遅延は暫く是れを寛恕すべしとするも、期に後ること一年、二年、乃至三五年に及ぶものは到底情狀酌量の限りに非ず。従來の豫約出版中、果して是の期限の點に於て當初の公約を履行せしものありや。良し嚴密に履行せざる迄も、一二月月位の遅延に止まりしものありや。吾人の知る限りに於ては、是の如き事例は一回だも是れ無かりし也。經濟雜誌社は豫約出版事業に於て尤も信用すべしと謂はる。而も同社の出版ほど期限の公約を無視せるもの無し。近き例は國史大系を見よ。其の第一巻を出版したるは去る明治二十九年にあり。當初の公約によれば一年有餘にして其の全部の刊行結了すべき筈なりき。然るに明治三十四年の暮に於て僅に其の豫定の書目を配布し得たるが如きは實に無責任の甚しきものと謂はざるべからず。たとひ内部に於て如何の事情あるにもせよ、經濟雜誌社は是の大違約に對して道德上の責任を覺悟せむことを要す。吾人は是の如き外形上の失態よりして同社の折角の事業に汚點を印したるを惜しみ、せめては將來に於て斯かる失態を再びする無からむことを切に戒告する者也。

◎同社の現に出版しつゝある群書類從の再版も亦國史大系と等しく如上の大違約の最中にあり。而して是の大違約の最中に於て更に續國史大系の出版に着手せむとす。世上の信用を博すること頗る難しと謂ふべし。同社は「相違無く」來る明治三十六年五月を以て是の大出版を完成すべしと誓約せるも、斯かる誓約が幾回となく無視せられたる後、若しくは無視せられつゝある間に於て、同社は果して「相違なく」と發言するの權利ありや、否や。我れ復汝の言を信ぜずと言はるゝも、同社は是れに對するの辯解の辭を有せざるべし。未來は知らず、過去に於ては豫約出版畢竟違約出版たり。公德頹廢の一事例として今の道學先生の好材料たるべきものたり。吾人は當來の出版者に向つて、是の無責任の惡慣例を再演する無からむことを切に戒告せざるべからず。差し當り經濟雜誌社の如きは特に吾人の苦言を謹聽すべきものとす。

◎以上は出版者に對する戒告也。次に編輯者に對して希望すべきことは一にして足らずと雖も、事直ちに出版費用及び賣買等に影響すべきを以て、如何に注文すればとて俄に其の實行を期し難かるべし。故に今暫らく言はず。唯、差當り比較的に行の容易なるべき左の二



項に就て注意を求めむと欲す。

◎一は巻頭に精密なる解題を附する事也。即ち其の書の著者編述の年代并に由來、其の書の價值に關する批評、若し異本異版あらば其の種類并に同異に關する考證又は批評等。凡そ這般の事項は總て是の解題中に説明し、讀者をして豫じめ其の書の性質を知了せしめむことを務むべし。近年古書珍本の出版一にして足らざれども、完全なる解題を缺けるが爲に讀書社會の被れる不便は甚だ少小ならず。當來古書の編輯者は、須らく是の不便を除去せむことを力むべし。

◎次は大冊の書籍には必ず完全なる索引を附する事也。抑、本邦に於て學術研究の困難なるは、常に書籍の得易からざるが爲のみならず、また索引の方法完備せざるを以て、探討考證の間に無益の勞力を費すが爲ならずむば非ず。吾人を以て見れば、是の障害を除去するの法は唯、二途あるのみ。即ち書籍全體に對しては完全なる「ビブソオグラフィ」を述作し、書籍各個に對しては索引を編成するにあるのみ。前者は茲に述ぶるも詮なき事なるを以て言はず。唯、後者は今の古書翻刻者及び編輯者の事業として左迄に困難なる事に非ず、吾人は

彼等が一舉手一投足の勞を吝まらずして、本邦學術の爲に是の事業を成就せむことを切望す。

◎索引にも人名に準ずるもの、事項に準ずるもの、若しくは歲月方處に隨つて分別するもの等種々の方法あり。若し望み得べくむばあらゆる方面より品彙類別して縦横遺漏なからむことを希望すべし。然れども若し望み得べからずとすれば、せめて人名索目丈けにても添附せられむことを望む、無きに優ること萬々なるべき也。例へば國史大系第十四卷の「元亨釋書」に人名の索引を附したる編者の用意は吾人の甚だ喜ぶ所也。然れども編者が第十五卷以下の「古事談」、「古今著聞集」、「今昔物語」等に對しても同一の用意を運らざりし事は吾人の甚だ惜しむ所也。

◎今の豫約出版者并に其の編輯者に向つて戒告し且つ希望する所、略、右に説けるが如し。畢竟其の美舉をして益、其の美を加へしめむとする老婆心に外ならずと知るべし。

◎大塚保治君、美術學校に於て「裸體畫の美術的價值」を論じて曰く、所謂裸體畫の表現し得る所は機械的若しくは生理的たるに過ぎず。高等なる精神的表現に至りては企て及ばざる



こと遠し。畢竟美術の品等に於て低級に位するを免れず、世の畫家者流が是れに隨喜するは其の技術を衒はむが爲のみと。其の説必ずしも斬新ならずと雖も、條理整然能く問題の委細を曲盡す。黒田氏一輩の裸體美崇拜者流は、一矢相酬る所なかるべからず。

◎中井錦城氏去つて讀賣新聞俄に其の言文一致を廢止す。言文一致會、會員幾人ぞ。其の行はるるや、人にありて法にあらず、殆い哉事也。

◎言文一致は畢竟今の時に於て疑問たり。『通れ』『お通りなさい』の論議に半日を費すが如き手際にては、同會の前途頗る遠遠なりと謂ふべし。日用の文尙ほ自ら能くせざるに、早く他に向つて實行を推奨す、何等の顛倒ぞ。

◎雑誌「教育界」新たに出づ。願くは趣味ある雑誌たれ、教育の全能の謬見を打破し、教育者をして自家の位置を正當に自覺し得しむるの雑誌たれ。教育的眼孔を以て世界を觀察するの雑誌たれ。世界的眼孔を以て教育を觀察するの雑誌たれ。多くの村夫子、道學先生の手に成れる文字を収録せざる雑誌たれ。教育は人を造るものに非ずして、人に造らるるものなることを鼓吹するの雑誌たれ。吾人の望む所、唯、是れのみ。

◎岡倉覺三氏、近日印度に遊ぶべしと傳へらる。想ふに印度美術の東西に於ける意義は氏の研究を待つて闡明せらるゝ所少からざるべし。殊に健駄羅彫刻と本邦美術との關係の如きは、本邦美術史上猶ほ未了の問題に屬す。吾人は氏が必ず是の問題に向つて多大の發見を獲來るべきを疑はざる也。

(明治三十四年十二月)

◎イブセンの病篤しと傳へらる。ラスキン逝き、ニイチエ仆れ、トルストイ亦た起つ能はざる今日に於て、實に是の報に接す、惆悵の思ひ何ぞ堪へむ。

◎イブセンの一生は其の著「ブランド」の主人公の如く好く戦ひたる生涯なりき。彼れが歐洲文明の批評家として樹立したる個人主義の旗幟は、十九世紀末の一大勢力を代表せり。彼は是の信仰の爲に母國に容れられざること二十餘年、近年歴にクリスチアナに歸り、民衆景慕の間に其の永遠の眠りを迎へむとす。是の如くにして得たる彼れが墓門の平和は實に貴しと謂ふべし。



◎トルストイ伯病みし時、幾多の醫師其の病を審にせず、伯乃ち歎じて曰く、今の醫師は醫學に於て知らざる所無し、唯、醫學其物は何事をも知らざる也と。味ある哉言や。希くは以て今の道學先生を戒しめむ。

(明治三十四十一月)

◎波蘭の大小説家シエンキーキッチ、近々奈翁の生涯を資材として一大歴史小説の述作に着手すべしと。何ぞ其の計畫の勇敢にして偉大なるや。我邦の小説家の如き、少しく顧みて考ふる所あるべき也。

◎大塚文學士が竹柏會にて述べられたる日本服の美術的價值に關する意見、「このものは第六號に掲げらる。其の大意は日本服の特質を明にし、殊に本邦女子の服裝が西洋女子の服裝に比して美術上の價值の大きいに優るものあるを説明するにあり。文藝界に於ける近時出色の評論と謂ふべし。是の論に對する正岡子規君の批難、去月中旬の「日本」紙上にありしが、未だ論者の精透なる組織的意見を搖かすの力無きが如し。

◎穂積陳重博士の近著「祖先崇拜と日本の法律」(英文)、また近時の學術界に最も注意す

べき著述の一なるべし。著者は先づ、祖先崇拜の起原を亡魂の畏怖に歸する從來の學説を否定し、子孫の情として愛敬の誠を盡すを以て其の基礎と爲し、人類の社會的生活を結成する求心力が是の祖先崇拜に外ならざるを明にし、更に進んで、是の見地より本邦固有の組織、風俗、習慣の特色を説明せり。特に外國文によりて出版せる著者の用意は吾等の首肯する所なれども、是の有益なる著述が弘く本邦人に讀まれむことも亦吾等の切に希望する所也。

◎吾人常に以爲らく、若し本邦歴史に就て歴史小説の材料を求むれば、聖德太子の事蹟の如きは其の絶好なるものなるべしと。而も本邦作家の中、一人の是れに想着せるもの無し。吾人平生以て遺憾と爲す。

◎今の偽善に充滿せる思想界に向つて、吾人は切に木村鷹太郎君の近著「アナクレオン」を紹介せむ。アナクレオンは快樂詩人也。我等は歡樂し、宴飲し、相愛し、美を頌せむが爲に生れたり、是れ天の命じたる人生の道也」とは、正しく彼れの精神也。其の詩、簡明にして快活、溫藉にして閑雅、庶幾くは怯懦、偏屈、枯淡、無味なる思想界に一道の生氣を吹き込むことを得むか。



◎津田梅子女史等の編輯に係る「英學新報」は、趣味と實益とを兼備せる英語雜誌として、最も成功せるものと謂ふべし。その近刊の紙上に英語不消化病を論ぜる一節の如きは、録して今の所謂青年文士等の戒となすに足る。

當今英學生の通弊として、書籍を多く讀むことを街つたり、又早く大家の詩文を嚙つて得意ぶらむとする。二三年も英語を習ふと直ちにミルトンだの沙翁だの、カーライルだのブラウニングだのにかつて見たくなり、殆ど何の便りにもならない英和辭書と首引きで、もうカーライルやミルトンを讀んだ積りで居る。是等の大詩人大文豪は地下でさぞかし日本の青年學生を怨んで居るであらう。

◎佐々醒雪、山口高等學校の教官を辭して上京し、書肆金港堂に入りて雜誌文藝界の編輯に従事すべしと謂ふ。吾人は醒雪が今の文壇に對して多大の信頼を有し來らざることを希望す。今の雜誌記者の事業の兒戲に類するもの多きことを悟らむが爲に、吾人は多年の苦き經驗を要したりき。一日の長を怙みて是の事を告げむ。實の處、吾人は今回の上京を以て醒雪の爲に好ましき事に非ずと思惟する者也。

(明治三十五年一月)

◎去年(明治三十四年)の暮、丸善書屋、現代知名の學者七十餘人に托して十九世紀に於ける歐米の大著述に就ての答案を求め、載せて先月(明治三十五年二月)同店發行の雜誌「學燈」紙上にあり。試みに文藝に關して如何の書の推薦せられたるかを見むか。

◎最も興味ある詩賦小説として、最も多く挙げられたるは、ゲーテのファウストなりき。是れに次いでバイロン、ユーゴー、テニソン、タルズテリス、カーライル、エマルソン等多數を占めたり。十八世紀の最大著述としてタル井の「種の起原」を推したる點に於て諸學者殆んど其の軌を一にしたるが如し。

◎吾人の嗜好を以てすれば、「ファウスト」は大詩篇たるに相違なきも、而も餘りに高大なるに過ぐ。吾人の感情が稀に人生の疑惑に觸れて異常の高潮に達せし時に非ざれば、彼は慰藉よりは寧ろ不安を與ふる也。吾人は「ファウスト」の大なるを是認す、然れども吾人自らの小なるを悲しまざるを得ず。

◎吾人はバイロン、ユーゴーを好むも、テニソン、タルズテリスを好まず、殊にタルズテリスの枯淡なる詩想は、人生の苦熱に惱まざるものにとりて甚だ無情なるを覺ゆ。其の所



謂自然の愛なるもの、吾人の煩悶を冷笑するにも似たらすや。彼は畢竟道學先生と學究先生との好伴侶也、野性吾人の如きものは則ち與らず。

◎吾人は英國詩人の中には最もバイロンを好み、獨逸詩人の中には最もハイネとキヨルネルとを好む。シルレルは冥想の譏あれども思辨の癖を免れず。ゲーテは大にして即くべからず、唯、仰いで敬すべし。

◎シヨールベン、ハウエルがダル、井ンに次いで本邦學者の間に讀まれたるは太だ吾人の意を得たり。シ氏の哲學は眞なるよりは寧ろ美也。其の文章の如きは、如何なる文學者の著述に對しても多く遜色あるものに非ず。

◎シ氏の學説は其の人物の如く甚しき矛盾に充つ。例へば美學上に於て絶対無上の價値を付與せられたる個人、天才が、倫理學に於ては一種の罪惡として其の個人的實在の根柢たる意志の斷滅を要求せられたるが如し。更に倫理上意志の斷滅を理想とせるシ氏自らの性格の如何に主我的、個人的なりしかを觀よ。

◎而れども神ならぬ人の強ひて其の裏生の矛盾を彌縫せむよりは、寧ろ忌憚なくそれを暴露したる所に却て天眞の美あり。吾人は是等一切の矛盾を包括したるシヨールベン、ハウエル其人に於て一個の眞人を見る。

◎最近十年間の大著述の中に、ニイチエを挙げたるは井上、大塚の二博士あるのみ。是れ吾人の意外とする所也。

◎ニイチエの説の當否は暫く措き、そが十九世紀文明の一大批評たることは争ふべからざる事實なり。彼れの言は或る意義に於て舊世紀文明の崩壞を宣傳したるもの、是の意義を身讀するは新時代の疑問を解決するに於て極めて須要の事なりとす。本邦の學者が皮相の識見を以て是の須要の事實を輕々しく看過せむとするが如きは、吾人の甚だ取らざる所也。

◎「ニイチエと二詩人」は登張竹風の著、嘗て「帝國文學」紙上に連載せられたる「ニイチエ論」とズーデルマン、ハウットマン二詩人の評論とを合綴したるもの。邦文にてなされたる殆ど唯一のニイチエ論として今の學界の一讀を要求するの權利あり。二詩人の傑作の梗概も亦面白し。ハウプトマンの「沈鐘」特に優れたり。「沈鐘」には下獨逸の方言多く、専門獨逸語學者の尙ほ太だ讀み難しとするところ、是の篇、簡にして要を得、而も文に於て遊ぶ所



あり。語學文章併せ至れるもの、竹風の如きは當今の一才子と謂ふべし。

◎「米僊畫談」は美術家の一讀を要求し得べき趣味ある新著也。其の包括するところ繪畫一切の事項に涉りて漏らす所無し。まゝ速斷杜撰の詆を免れざる所ありと雖も、著者の識見と博學とを窺ふに足るべし。畫法論の一章最も讀むべきが如し。

◎是の書、卷初に掲けたる徳富蘇峰の序文中、著者の畫才を品評せる言、最も肯綮に中れり。曰く、君や意匠に饒み、剪裁に巧に、染點に長ず。眼に觸るゝもの、一として畫題たらざる無く、手に觸るゝもの、一として畫帖たらざる無し。但だ君が累を爲すは、滿腹の霸氣抑えんと欲して克はず、才筆縱横、時に英雄人を欺くの態ありて、筆墨以外に高情遠神を制するの韵致と、雍容大雅、沈着雄渾の氣象とに於て聊か慊焉たるものありしもの、是れのみと。蓋し知言と謂ふべし。

◎「日本隨筆索引」は太田爲三郎君の著也。本邦の重なる隨筆百六十四種を撰び、其の書中の事項を五十音假名順によりて字書體に排列したるもの、學徒座右に缺くべからざるの書

と謂ふべし。蓋し隨筆の物たる、素と一定の體制を具足せるにあらず。唯學者隨時の漫録に過ぎざるを以て、其の記する所頗る有益の材料を含蓄するにも拘らず、旁證參考の用に臨みて俄に索引し易からず。故に隨筆をして其の用を果さしめむと欲せば、須らく無用の日に讀みて有用の時を待たざるべからず。是れ多忙なる學者の太だ難しとする所也。是の書の如きは眞に是の缺陷を補充して隨筆の本用を全からしむるもの、著者の勞や蓋し多と謂ふべし。

◎本邦書籍學の完成は今日學界の急務也。唯、是の種の事業、名利を離れて眞に學術に忠なるものに非ざれば能はず。吾人は是の點に於て太田氏の著書の名譽を是認し、併せて世上篤學の士が奮つて是の事業に獻身せむことを切望す。

(明治三十五年二月)

◎國民の注意すべき二個の紀念祭は今月に於て施行せらるべし。菅公千年祭は其一也。日蓮の立宗六百五十年紀念會は他の一也。

◎前者と吾人と何の關はる所無し。何となれば、多恨なる詩人、小心なる政治家、順良なる王臣と云ふの外、吾人は菅公に於て何物をも認むる能はざれば也。唯、後者に關しては一



言の讀者に告ぐべきものあり。

◎吾人の見る所を以てすれば、日蓮は日本が嘗て産出したる人物の最大なるもの也。彼れを以て日本のルーテルと呼ぶは誤れり。彼れの偉大は獨り基督のそれに較べ得べきのみ、同國人として彼れを追懷し、景仰し得るは、國人にとりて大いなる力也。

◎彼れの人物を歎美すること、於て佛教徒は宜しく其の宗門の争を抛つべし。基督教徒も國學者も亦其の小偏見を排斥して齊しく彼れにアヤかる所無かるべからず。

◎吾人は是の一大偉人の紀念祭が區々たる日蓮宗徒の一部によりて經營せられつゝある間に、國民を擧げて牛馬相關せざるの觀あるを見て轉々、惋惜の念に勝へざる也。

◎遮莫、今の日宗徒は何の面目ありて其の宗祖の紀念を新たにせむとするや。今日宗風の衰頹、僧侶の墮落、其の由つて來るところ果して那邊に存すと爲す。日蓮の遺風は既に墜ちぬ。彼等は何を以て所謂紀念會の實を擧げむとする。道路傳道や演說集會を以て彼等の能事了れりとするあらば、是れ獨り日蓮の罪人のみに非ざる也。

◎吾人は茲に田中智學氏の近著本化攝折論を江湖に紹介せむと欲す。是れ佛教根本の一間

題たる攝受折伏に關する著者の意見を披瀝せるもの。高遠なる議論を行ふに平明なる文字を以てし、論斷極めて明快也。蓋し一部の日蓮主義として見るべき乎。是れ一宗一門の徒の私すべきものにあらず。吾人は今の學者青年が是の種の書によりて其の知見を開拓せむことを切望する者也。

◎當今若し倫理上の緊急問題ありとすれば、そは德育問題にも非ず、公德問題にも非ずして、道學先生自らに對するの倫理問題ならざるべからず。

◎何をか道學先生に對する倫理問題と云ふ。彼等自らをして道德を口にするの資格なきことを自覺せしむる也。否、倫理學說其物の本來無價値無能力なることを證悟せしむる也。

◎倫理學說は猶ほ蛆の如し。そが徳教の腐敗を救済するの力無きこと、猶ほ蛆が糞土の汚穢を清淨にするの力無きが如し。而も腐敗に伴へる必然の產物なることは彼此相同じ。

◎借問す、東西三千年の歴史中に於て、道學先生の所謂道德論が、世を救ひ人を化したるの例しありや。



◎凡そ古より積極的に人生の幸福を増進し、希望を豊富にし、吾人に理想と平和とを與へ吾人を感じ、鼓舞し、以て生々發展の大道を助成したるものは宗教也、文學也、美術也。然らざれば唯心論の哲學也。我が道學先生の所謂道德と、學究先生の所謂眞理とは共に與からず。

◎學說理論は常に文明の崩壞に伴ふ。然れども理想は永遠に失はれたる也。是に於て彼等の所謂文明は、實は文明の崩壞の謂のみ。

◎凡百の學知、岐路百端、造詣愈、深くして人生の歸趣を去ることいよく遠し。大宗教、大文藝に對する向上の渴仰、是に於てか猛然として起る。是れ即ち失はれたる文明に對する十字軍也。

◎丁酉倫理會にてニイチエを批評す。惡護するもの曰く、是れ日蓮上人を鎌倉殿中に糺問するの類のみ。差向き平。左衛門の役目は中島德藏氏か、桑木殿翼氏かと。蓋し齊東野人の語ならむのみ。

◎然れどもニイチエを解する者は、所謂倫理學を知らざるも可也、認識論に通ずるを必とせず。彼は唯、少くとも文藝宗教の趣味を解し、現代人生の甚深なる苦悶を身讀したるものならざるべからず。是の如きは獨りニイチエを解するのみならず、亦人々相解するの道也。

◎ニイチエは人也、然れども人は必ずしも學者、文人、宗教家等と分たるを要するものに非ず。ニイチエにして是等の何者に非ずとするも、何の累する所ぞ。各自は知解に本づく、然れども世には知解以上の證悟によりて初めて了し得べき幾多の事物あることを知らざるべからず。

(明治三十五年四月)

◎新刊小説に冷淡なりとて吾人を責むる者あり。誤れり。如何ほど今の作家を紹介し、稱揚せむと務むるも、そは吾人の力の及ばざるを如何せむ。吾人の趣味は極めて褊狹也。右手に葡萄の美酒を擧げて左手に混成酒を捨てざるが如き寛裕なる態度は、吾人の摸倣し得べき限りに非ず。

◎然らば則ち今の創作に對して見る所無き乎。曰く大いに有り。唯、是れを口にするの徒らに他の累とならむことを患ふるのみ。小説雜誌の編輯者に非ざる吾人は、如何ほど今の狹



心なる作家に怨まるるも、毫も痛痒を感ずるものに非ず。諸君にして若し望まば、吾人の批評は易々たるのみ。

◎「文藝界」載する所の眉山の「無言の聲」、蓋し尙ほ近出新作中の錚々たるもの乎。少女お勝の性格は前後矛盾の詆ありと雖も、末段小公子澄男が懺悔の一節はほゞ作者所期の托想を現じ得たるに近し。而も全篇を通じて情淺く筆到らず、畢竟益石裏の景趣のみ。唯、其の文の清艶にして才氣あるを歎ぶべしとせむ。

◎近時「讀賣」紙上に現はれたる『金色夜叉』の續稿を見よ。是れミア、レトリックのみ。情死し想涸れ、強ひて粉黛によりて皮相を装ふに過ぎず。宮の書狀の如き、毫も真情を訴ふるものの態を見ず。

◎『有繫に他の老婆子が寂しき給仕に義務的吃飯を強ひらるゝの比にもあらず』と云ふが如きに至りては、レトリシアンレトリシアンの稱號さへ覺束なし。吾人は紅葉の前途を否定せじ、唯、其の態度を一變するの覺悟あらむことを勸告する者也。

◎「萬朝報」掲ぐる所の涙香の「巖窟王」終局に近づくに隨ひて筆力ますます加はれり。

毫も修飾の痕なくして生氣紙上に溢れ、而も文に一種の奇構ありて能く讀者をして二百數十回の長篇に倦まざらしむ。殊に巖窟島伯爵が野西子爵に決闘を申込み、水夫友太郎の服裝を爲して踊躍して之に向ひたる一段の如きは、原文の妙素より與りて力ありと雖も、譯筆亦奔放自在を極む。今の所謂小説家の空文を弄して俗目に媚びるものに比し、其の優る幾十等なるを知らず。

◎近刊の早稻田學報に、三上博士の「徳川家康論」を掲ぐ。其の價値の批判の如きは吾人の能くする所に非ずと雖も、勤厚精勵なる博士の學風に見て、蓋し永く史界の鍼案となるべき一大論文なるべし。

◎博士は家康が佛教諸宗に公平なりし事例を擧げて其の一美德と稱せられたり。家康果して諸宗に公平なりしや否やは、吾人に於て多少の疑問無きに非ず。例へば、かの常樂院日經及び其の門下に對する迫害は如何。慶長十三年に於ける江府宗論の顛末に就て、家康の態度は果して公平なりと稱するを得べき乎。吾人は三上博士が是の點に關する意見を聞かむこと



を希ふ。

◎今年春季の繪畫展覽會は概して好成績を以て許すべからざりしが如し。殊に美術院一派の青年畫家の作品に對して、吾人は満足の意を表すること能はざるを悲しむ。知らず、諸子は自家の進路に就て明瞭なる意識を有せりや。諸子の多くは自ら理想派を以て居るもの、知らず、其の所謂理想は諸子の進路に何等かの光明を投じつゝあるか。吾人は諸子が時に其筆を擱きて自家の意識を檢覈せむことを望む者也。

◎展覽會の形體に關して改良すべきもの甚だ多し。其の出品に大淘汰を加ふるも亦其の一也。毎次の會場に於て眞に觀るべきものは多くとも二三十點を超えず。而して現に陳列せらるゝものは常に千餘に至る。是れ營に觀者を苦しむるのみならず、展覽會の品位を墜すものと謂はざるべからず。

◎彼と此と比較するは固より其の倫に非ざらむ。然れども英國王立美術院の年々の展覽會の如きは、其の撰擇の嚴重なる、特別審査員の手に觸るゝだに既に畫家にとりて重大の名譽

なりと思惟せらる。一代の英才タルナー十七歳の作品が、其の陳列の撰に上りしが如き、傳へて藝苑の逸話となれり。アルバート・ムーアの如き名家すら、死するまでは是の美術院の賞典に與りしことあらざりき。是れを本邦の展覽會が來者不拒の態度を以て、成るべく列品の多からむことを望み、金銀銅の諸賞牌を惜氣もなく濫受するに比すれば、果して如何ぞや。

(明治三十五年五月)

◎英の僧正バーカー、大いに皇帝を罵つて曰く、帝は日曜日に教會に行かずして劇場に行く。是れ基督の罪人に非ずして何ぞ。予は皇帝の忠臣たらむと欲するも、而も基督に不忠なる能はずと。

◎僧正の言や太だ佳し。而も是の激語に喝采せる英國民は福ひなる哉。アングロサクソン族の前途尙ほ多望なりと謂ふべし。

◎是れを我國宗教家の競々として時勢の迎合に務むるに比す、そもく何等の相違ぞや。彼等は神の物をも尙ほカイザルに還さずむば已まず。超世の理想永く消え失せて靈は翼なきものとりぬ。あゝ是の如きをしも尙ほ宗教と謂ふべき乎。



◎是の如き國民も尙ほ其の祖先の中に日蓮上人の如き人を有したりき。宗教家よ、六百年の往時を顧みよ、少しく自ら恥づる所あらすや。

◎日蓮、佐渡より赦され歸るや、鎌倉の殿中に激語して曰く、日蓮生を王土に受けられたば身は隨ひ奉るとも、心は隨ひ奉るべからずと。是れまさしく四福音書中最大の宣言たる神の物は神に返せの意に非ずや。身は是れ佛子法臣たり、何ぞ一俗吏の爲に大覺世尊の告教に違ふべき。神の國は遂に人の國に非ざる也。

◎されば日蓮にとりて實在せるものは宗教のみ。唯、この宗教を護持する所に國家の職能あり、榮光あり。一切世間の權勢威力の如き、正法護持の因縁を離れては一も存在の意義ある無し。是れ獨り日蓮のみならず、釋迦基督の眞意にして、乃至一切の宗教の依つて樹立する所の第一義也。

◎是の故に謗法の國土は一日も存在せしむべからず。佛天の威力は是の膺懲の爲に世界を監視しつゝあり。恰もクロムエルがダンバーの戦を目して『神事』と稱せし如く、日蓮は蒙古の來侵を以て謗法の國土に對する當然の佛罰なりと思惟したりき。

◎あゝマルストンの戦場に臨み、ダビデの詩篇を誦したる人の信仰を解し得る人に非ずむば、恐らくは吾人の言に首肯し能はざらむ。殆い哉、吾が言や。

◎井上圓了氏の「甫水論集」は必ず世上に歡迎せらるべし、所謂護國愛理の二主義を標榜し、野にありて哲學的知識の普及に力めたる氏が二十年來の經歷は、今の操持なき學者間には兎も角も珍しき事例たるを失はず。其言概ね平明にして解し易く、事を淺近に假りて理を高遠に托す。用意見るべきものあり。其說に服せざるものをして尙ほ快く其言に聽かしむる圓通滑脱の技倆は、氏に於て特に推重すべしとす。氏も亦所謂老大家の風ありと謂ふべし。

◎然れども吾人は所謂老大家に於て幾多の儻らざる所あり。其說の中正を求めて斷案の多く曖昧なる、世故閱歷に長ずるの弊として青春の理想を失へる、敵を作らむことを恐れて故らに圓滑の辭令を用ふる、文情共に平穩に過ぎて讀者を動搖するの力無き、概ね皆然らざるは無し。

◎若し所謂中正を以て旨となさむか、事是れより容易きは無けむ。唯、平淡和樂の辭は時



弊に對するの立言として人を動かすの力無きを如何。人往々矯激を以て吾人を責む。吾人不肖と雖も豈駁者の言を待つて所謂半穩の理を解せむや。

◎餘事は暫く惜かむ。『雨水論集』中、吾人は『余が所謂宗教』の一篇を推さむ。是れ曾て哲學雜誌に掲げられたるもの、近時の宗教論中色讀體達の旨義に於て尤も吾人の意を得たるに近し。

◎氏は佛教教理に於て台家の所謂事觀の妙法によるもの如し。佛教の厭世教に非ざるを主張し、眞如開發の現實世界に即して直ちに安立の地盤を求むべきを説くところ、淨土念佛の厭離思想を取らずして寧ろ日宗哲學の一念三千の眞意に近しと謂ふべし。將來の佛教に就て日蓮宗諸師に望むの一篇も亦氏の思想の傾くところを見るべき也。

◎予は佛教教理に於て全く門外漢たり。然れども台家一流の此土寂光の妙理を擴充して一大現世教を建立したるの一事は、實に日蓮上人の大卓見なることを認めざるべからず。井上氏の眼を是の點に着けたるは、吾人の同意を表する所也。

◎『天下萬民諸乘一佛乘と成りて、妙法獨り繁昌せむ時、萬民一同に南無妙法蓮華經と唱

へ奉りて、吹く風枝を鳴らさず、雨壤を碎かず、代は義農の世となりて、今生には不祥の災難を拂ひ、長生の術を得、人法共に不老不死の理り顯はれむ時を御覽せよ。現世安穩の證文疑ひあるべからざるもの也』。是れ即ち『此土即寂光』の事觀の教相を現實的に表彰したるの言なりき。

(明治三十五年五月)

◎道德を説くに日常市井に見る所の平凡の事實を以てせよ。何人にも學んで得らるべく力めて達し得べき類例を以てせよ。非常異例の事を語る勿れ。英雄豪傑の傳奇の如き、兒童の心を動搖するものは力めて是れを避けよ。——是れ今の道學先生の吾人に訓ふる所也。甚しい哉今の倫理教育の俗惡凡庸を極めたるや。

◎平凡の人を作るに何ぞ故らに教育の煩はしきを待たむ。非常の時に處するの道、是れを教ふる平日に於てに非ずむば、果して何れの時に於てぞ。且つ夫れ道德は摸倣に非ずして感應也。英雄豪傑の事蹟を體するの時、現はるゝところは大きいなる理想の光被也、新たなる生命の化育也。夫の道學先生の如きもの、畢竟是の三昧を解せざるの弊に坐するのみ。



◎凡人を作るのみが教育の目的には非ざるぞかし。天才無き人類を想像せよ、是れあらゆる想像中の最醜最悪なるものに非ずや。釋迦、基督、プラトー無く、ミケランヂェロ、沙翁、ゲーテなく、シロムエル、奈破翁なく、孔子、日蓮なき世界の歴史を想像せよ。嗚呼、誰れか是の如き想像に勝へ得るものぞや。

◎世に若し天才を作るの道あらば、そは天才を崇拜することに外ならず。凡俗に甘んずる人をして欲するがまゝに凡俗ならしめよ。天若し一個の天才を降さむが爲に吾人に要むる所あらば、吾人は如何なる犠牲をも貴しとせざらむ也。

◎蠢々乎として生死するもの、世に幾億兆ありとするも、永遠なる人道に於て何の徳とするところぞ。百萬の生靈は斃れたり、然れども一奈破翁の名を歴史に留めむが爲の代償として、何の悔ゆる所ぞや。

◎道學先生よ、何ぞ盛んに英雄豪傑の非常の事蹟を以て汝の子弟に教へざる。彼等をして英雄豪傑たらしむべくむば、素より大いに可也。依りて以て夫の凡俗の小人をして自ら恥ぢしむる所ある、尙ほ可ならずや。

◎人は輒ち真理と言ふ。請ひ問はむ、そは汝の真理か、將た吾れの真理か。若し汝と吾れと互に見る所を同うせば、是れ多數決の真理のみ。汝と吾れと共に與らざる。

嗚呼、世の所謂真理は道德と等しく畢竟多數決に非ざる乎。ジュゼッテルの彼方に於ても、一と二との必ず三を成すことを誰か保し得るや。

◎自ら道德を造る者のみ能く善惡を口にし得べし。エミール・アンリが判官に答へたる言葉に聽け。吾人をさばく者は、吾人自らならざるべからず。

暫く他を許して其の所謂善惡を言はしめむ。而も爾等の中、罪なきもの、唯かく言ひ得べきのみ。

◎會て吾れ、多くの人の意味を知りしが、而も吾れ自らの誰れなるかを知らざりき。吾が眼は吾れ自らを觀むには餘りに吾れに近かりき。貴いかな是の覺醒や。

◎社會は多く其の寵兒を殺す、是を以て眞人は多く死して而して初めて活く。

人よ、汝を殺すものは必ずしも刀杖に非ざる也、鳩毒に非ざる也。俗人に擁護せられ、惡世に讚美せらる、是れ永遠の死滅也。



「肉に死するものは肉に活くるを得む」、たゞ靈の滅ぶるもの、吾れ是れを如何ともする無き也。

◎吾が説や多くの人に容れられじ、然れども何人にも破られじ。

吾が言に聽いて喜ぶ人は少からむ、然れども世界の人のすべての歡びも、吾れ自らの満足に比すべからざる也。

此處に吾れあり、彼處に日月あり、かの紛々擾々たるもの、夫れ是の事實を如何せむとするや。

◎人に訓ふるは吾れの能くする所に非ず、人に與ふるも亦吾れの能くする所に非ず。吾れは唯、水の如く流れ、鳥の如く歌はむのみ。宿因若し空しからずむば、願くは吾れと同じきものと共に是の天賦の榮光を讚美せむかな。

◎我れは我れ自らの爲に活く。若し社會國家にして與るあらむと欲せば、彼等は先づ我が有たらざるべからず。

三千法界を以て是の一念に攝折す。忠孝節義初めて共に語るべき也。(明治卅五年六月)

◎マキシム・ゴルキの評論が民友社から出た。由來露西亞と云ふ國は、とかく文明の謀叛者を出す國であるが、このゴルキは又格別なものだ。世人は野獸的ゴルキなどと何も驚き騒ぐにも及ぶまい。彼等は、彼等の呪咀する人物によりて、漸く自己の意證に近づきつゝあるのである。

◎罪無き者は審判の聲を恐るゝものではない。ニイチエやゴルキを人が刑事巡查の様に嫌がるのは、皆己れに犯せる罪があるからだ。

◎其は兎に角、世上の文學者は深くゴルキに顧みる所あつて然るべしだ。彼は二十餘年の開浮浪の生活をした一無學漢であつた。然し彼は是の間に、天地人生の中に鏗刻せられたる金文を、其の涙と血とで讀みわけたのである。文學者としての彼れの成功は實に是の身讀體達の大教育に原つたのだが、書物を讀むだけ講義を聽いたりして、それでは是の世の事が獨り解るものなら、ゴルキは今日でも矢張り一浮浪漢であつたであらう。(明治卅五年七月)



吾人は想ふ、平和は餘りに長く此世に續きたり、斯くて人は是の平和の世の長きに慣れて餘りに平氣になり過ぎたるに非ざる乎。

怪しむを要せざる也。鮑魚の市に入るもの、久しうして其の臭きを忘るゝが如く、彼等は凡ての物に對して驚きの心を喪へりと覺し。憂あれども憂へず、悲しみあれども悲しまず、疑ふべきに安んじ、惑ふべきに住まる。文明の苦痛は此世の上下に充ち満つれども、彼等恬として省みず。たゞ、名聞利養の外に世間又疑惑なるもの存するを解せざるもの如く然り。嗚呼、人は何時まで自ら欺かざるべからざる乎。

現世に於ける一切の學智と道德とは、其の根柢に於て既に現世を是認す。彼等は現世を超越せずして附隨し、審判せずして讚美し、戒飭せずして阿從す。一代の文教、詮じ來れば現世の註釋に外ならざるのみ。

山に入りて山を見ず。此世の真相を知らむと欲せば、吾人は須らく現代を超越せざるべからず。斯くて一切の學者と道德とを離れ、生れながらの小兒の心を以て一切を観察せざるべからず。

嗚呼、小兒の心乎。玲瓏玉の如く透徹水の如く、名聞を求めず、利養を願はず、形式方便習慣に充ち満てる一切現世の桎梏を離れ、あらゆる人爲の道德、學智の繫縛に累はされず、たゞ、本然の至性を披いて天真の流露に任かすもの、あゝ、獨り夫れ小兒の心乎。

吾人素と學無く才無し。唯、野性の生れながらにして移し難きものあるのみ。年來人に離れ、世と絶し、藐然として天地の間に嘯く。私かに想ふ、是の心それ或は小兒の心に遡らむ乎。願くは依りて以て聊か平生の疑惑を陳べ、録して大方の教を請はむか。

人の生を求むるは此の生に價値を認めれば也。即ち知る、人生畢竟價値に外ならざるを。

人生既に價値也、是を以て人生の歸趣は常に最大の價値と相伴ふ。最大の價値の存する所即ち是の價値の所有者にとりて人生の全意義の包括せらるゝ所也。至上の幸福茲にあり、最高の道義も亦茲にあり。絶對也、無上也。苟も自我の存在する限り、天上天下無二亦無三の



尊貴也。人は是れが爲の故に執着し、欲求し、煩悶し、戦闘す。時として繼ぐに死を以てして悔いざる也。豈營に悔いざるのみならむや、彼は是の如くにして其の生存の意義を全うし得たるを喜ぶ也。

看來れば事體極めて簡明なるに非ずや。吾人は生く、生くるは價値の爲也。即ち最大の價値と共に生き又死するは、理の當然にして事の必至也。是の如くにして吾人は是の世に生死する能はざる乎。

世に道德なるものあり、吾人の行爲を判決して善惡是非の目を立つ。人は是の判決を憎れて偏へに其の則に違はざらむことを是れ力む。知らず、是れ果して何の意ぞ。

人生の價値なるは既に是れを了す。而して記せよ、價値はそを有する者のみの價値也。能持の主體を離れて世間又價値なるものの存せざること、猶ほ眼を去りて色なく、耳を外にして音無きが如し。即ち價値の物たる、主觀的也。

音に主觀的なるのみに非ざる也。價値は畢竟個性の反應に外ならざるを以て、同一事物は必ずしも凡ての人に對して同一價値を有すること能はず。即ち價値は主觀的なると共に、個人的也。

既に個人的也、是を以て價値の物たる、與ふべからず、受くべからず。辯以て強ひ難く、力以て傳へ難く、言説理解を超越して人々自ら自得するの外無きのみ。換言すれば、價値は自ら創造し得るものにして初めて其の所有者たり得べきのみ。

人生既に價値也、而して價値の主觀的にして個人的なる、亦既に是の如し。畢竟生を此世に享けて、茲に自ら人生の價値を造り、其の價値の最も大いなるものに隨つて安住の地を求めむと欲す。人生の意義又盡せりと謂ふべし。他の目して善と云ひ惡と云ふ、吾に於て何の關はる所ぞ。若し道德の目的にして最大の幸福を與ふると云ふにあらば、吾人は既に是の如き道德の實行者たるにあらずや。豈營に實行者たるに止らむや、更に又其の創造者たるにあらずや。

試みに是の言を録して道學先生の座右に呈せむは如何に。



是の如く言はば、難者必ず言はむ、無数の民衆は汝と共に此世に共存せり。社會是れが爲に起り、國家是れが爲に立つ。所謂道德は是等凡ての民衆の幸福の爲に存する也。汝の言ふ所の如きは是れ汝一人の事のみと。

嗚呼、汝一人の事は何故に爾かく重しとせられざる乎。吾れは吾れ自らの爲に生きずして抑、何物の爲に生きべき乎。吾人は必ずしも社會國家を輕しとせざるも、而も吾れ自らの重きに比すべからざるを思ふ。他愛可也、博愛又妨げじ。畢竟唯、是れ意識上の問題のみ。換言すれば、一個の客體としての社會は吾れに於て没交渉也。唯、是の客體にして吾が主觀上の事實となり、茲に吾が生存の上に於て多少の價値を認めらるゝに及びて、吾れと彼等と初めて亦多少の關係を有し來るべきのみ。吾人は是の意味に於て與衆を認容し、國家を認容す。畢竟、外より吾れを折くに非ずして、内より彼等を攝するのみ。是の攝折の意義を解せざる人は、未だ會て個人の尊嚴を解せざるの人也。

吾人會て曰へらく、三千法界を以て是の一念に攝す、道義初めて語るべしと。即ち是の謂のみ。嗚呼、今の道學先生の幾人か、果して能く這般の消息を解し得べき。(明治三十五年十月)

雜談

○當代の煩瑣凡俗なる思想界に反抗して、美育社の一團體を組織したる黒田湖山君は、この頃「大學攻撃」と云ふ一小説を著した。讀むで表題の如く、今の帝國大學の攻撃を目的とせるもので、一篇の主腦は最後の章に於ける人本義之進の大氣焔にある。小説としての技術は大に未だしき所があるが、著者が其の平生の主張を托せるものとしては多少の成功を認むべきである。唯、著者の大學觀の餘りに單純なる、如何ばかり青年學生以外の、例へば大學當事者の如き人々を動かし得べきかは頗る疑問と云はなければならぬ。

○世間で大學の攻撃をする人は随分多いが、其の攻撃の背景に中れるものとしては極めて稀に見る所だ。畢竟、ロクに大學の門戸をも窺はぬ人が、不十分なる材料を嫉妬や憎惡の偏見で、コネ廻はした結果に過ぎないからだ。我輩は大學出身の故を以て辯護するものでは決して無いが、淺薄な見當違ひの批難には同意することが出来ない。



○例へば、世間の攻撃で一番聲の高いのは、今の帝國大學が人物を養成しないと云ふにある。成程一應は尤もに聞えるが、扱て大學の事業として、如何にして人物の養成が出来やうか。例へば、工科の學生が器械や製圖、もしくは探鑛冶金や土木工學を學びつゝある間に、如何にして其の學問によりて人物を養成せらるることを望み得べきであるか。醫科の學生に生理學や解剖學の講義を授けつゝある間に、其の教師は如何にして是等學生の人物を養成することが出来やうか。

○人物養成と云ふ様な事に一番縁の近いのは、法科と文科とであると誰も思ふであらう。然しながら是れとても工科や醫科と同じことだ。商法や訴訟法の講義中に人物養成も何もあつたものでない。實驗心理やフネチックの講義によりて人物が高まるものならば、それこそ摩訶不思議と云はねばなるまい。

○つまり人物養成と云ふことは、抽象的に大言する時は尤もらしい事ではあるが、その實際に立入つて考へて見ると、今日の學制では決して行ひ得べきことでは無い。畢竟今日の大學は天下の人才を集めて職業上の教育を施す所と見るの外は無い。それ以上を望むは、今日



の國情に伴へる大學の實際を知らぬものと云はなければならぬ。

○斯んなことを言ふと、何やら教育家先生の口吻に似て居る様だが、世間の誤解に對して一應辯じ置くのみだ。然らば大學には缺點が無いかと云ふに、それは大有りだ。我輩の眼から見れば、世間の攻撃などよりも遙に根本的な、遙に實質的な批難が多々あるべしと思はれる。我輩は大學出身者として、學閥論者の一人であるが、さりとて今の大學に謳歌するものでは決して無い。此の邊の精しい所は他日必ず世に公表するの機會があらうと思はれる。

○姉崎嘲風の手紙に、ラスキンの演説を引いて、英吉利の國民が如何に其の警醒者の言葉に耳を傾くるかを稱揚して居る。此の演説の一節は我邦の教育界の時弊に適中して居ると思はるゝによつて左に抜萃しやう。

○『英國人は一般に教育に對して大なる誤解を抱いて居る。即ち教育を以て生活の一方便と心得て居る事がそれである。教育は利益の多い商賣どころでは無い、實に多くの費へを要するものである。最も立派な教育は利益の最も少い、到底金錢上の勘定に合はぬものだ。何



れの國民か其の偉大なる美術、其の偉大なる智慧でパンをまうけたものがあらうか。パンは小さな技倆や製造や又は實用上の知識で得られるが、高尚なる學術、高尚なる哲學、又は高尚なる藝術は、金を出して買ふべき寶で、決してパンの爲に賣るべき貨物では無い。國民教育の爲には大いに費すべきであるが、是れに依つて得る所のものは金でなくて人物であることを覺悟せねばならぬ。此の人物は即ち諸君の金に値するもの、英國の寶である。

○我邦の教育者、殊に私立學校の教育者は、ラスキンの是の言葉に深く省みる所があらなければならぬ。彼等は教育と云ふことを餘りに廉いものと心得て居る。高が生徒の月謝で維持が出来、三十萬圓もあれば三個の大學をすら建立することが出来るものと心得て居る。斯んな風であるから教育を以て一種の商賣と考へて、是の考へを實行して居る所謂教育家が甚だ多い。東京市内の私立學校の大多數は即ち其れなのだ。つまり彼等は米屋となり下駄屋とならない代りに學校屋となつたのみで、其外に何の意味も無いのだ。斯う云ふ連中が如何にしてラスキンの所謂國家の寶を作り出すことが出来やうぞ。



○先頃、ゲオルグ・ブランダースの論文を読んだ所が、中に國民主義に關して面白い觀察があつた。今左に其の概略を紹介しやう。

○十九世紀の中頃より今日に至るまで、世界の大部分の國民主義であることは言ふまでも無い。國民主義は言ひ換へれば人種主義だ。同人種互ひに相結合して各血族團體を造つたのが、畢竟前世紀の主要なる政治上の事件であつたので、國民の争ひも所詮は人種の争ひに外ならぬのである。斯かる世の中で、是の國民主義と矛盾せる幾多の事實が公々然として認められて居ることを見るのは頗る面白いでは無いか。

○第一、少くとも、歐羅巴の四大國民の名は何れも皆外國の名である。即ち佛蘭西と云ふ名稱は萊因河の兩岸に棲んで居つたフランク人から來たもので、是の國民の祖先たる古のケルト人とは何の因縁も無いものだ。本來ならば、ガリアとかラテンとか名告るべきであるのが、フランスとは實に奇だ。英吉利の名は素と獨逸の一地方から來た名で、アングロサクソン民族と何等血族上の聯絡が無いのである。魯西亞てふ名は素と北方の起原で、スカンヂナビアの一族たるロゼルネから轉訛したのであるから、無論今の魯國人の祖先とは關係は無



い。普魯西は素とはプロイセンと云ふスラブの一蠻族の名で、十二世紀の終り頃に獨逸に  
つたのである。

○第二。所謂國民的英雄の多くのは他國人若しくは他國人の子孫である。例へば澳太  
利のオイゲン公はサボイの人で、チリーはバイエルンの人。また匈牙利の英雄ベムは波蘭人  
で、佛蘭西のモリッツは獨逸人である。奈破翁は伊太利人で、璉馬の豪傑トルデンスキョル  
ドは那威人である。斯んな類は外にも中々多い。

○第三。所謂國民的詩人、美術家の中にも、外國人が甚だ多いのである。瑞典の國民詩人  
ベルマンはブリーメンの人で、璉馬國の大彫刻家トルワルゼンはイスランドの人。又オーレ  
ンシレーゲルは父側も母側も共に獨逸人である。同じ國の作曲家として名高きクーラウもエ  
ーゼも何れも皆獨逸人の子孫だ。ヘンリック・イブセンと云へば那威人を人が想ひ出だすであ  
らうが、實は璉馬の漁師の家から出た人で、血統上からは純然たる獨逸人だ。魯西亞の大彫  
刻家たるアント・コルスキーは父母とも純然たる猶太人である。獨逸人の誇りとするハイネも、  
ビョルネも、共に猶太人で、其他、學者では、カントは蘇格蘭人、スピノザは猶太人。又近く

は社會主義の泰斗たるフェルデナンド・ラサールや、カルル・マルクスも、また天才論を以て  
名高き人類學者ロムプロゾも皆何れも猶太人である。

○第四。一國の司配者若しくは權勢者が外國人である事例の甚だ多いことは、最も興味あ  
る事實である。魯國を司配するロマノフ家は素と獨逸のホルシタインから出たので、瑞典、  
那威の司配者たるベルナトット家はガスコニーから出たのだ。支那人の帝王と仰ぎつゝある  
は漢人種に非ずして滿洲人である。璉馬の皇子と魯西亞の皇女とは希臘皇太子の兩親であつ  
て、獨逸帝室の一公子とキード公女とは何の因縁も無きルーミア人の上に君臨し、澳太  
利の大公女は西班牙の攝政となり、ブルガリアの國母は佛蘭西のオルレアン家の出である。  
王室以外に就て見ても、マザリンも、奈破翁も、ガンベッタも、何れも素を糺せば佛蘭西人では  
無い。英吉利のデズレリーは云ふまでもなく猶太人であつた。愛蘭の無冠の王とまで稱せら  
れたバーネルは、愛蘭人で無いのは素より、愛蘭人の屬して居るケルト人でもなく、全く彼  
等の敵なる英吉利人であつた。

○ブランデスは是等の事實を擧げて、國民主義や人種主義の行はれつつある今の時に、か



かる事實の存することは左程怪しむべきでは無い。人道主義、非國民主義の大いなる眞理。是の間に其の一端を現はして居るのであると結論した。

(明治三十五年十月)

○東本願寺は何時まで、たつ事か、世間では恰も國家の大事件でもあるかの様に騒ぎ立てるが、謂はば地方の豪家の相續争ひの様なもので、左右甲乙何れでも好いではないか。

○東本願寺は一個の宗門として果して改革し得らるるものであるか。是れ我輩の大に疑ひ怪しむ所である。今の所謂改革運動の如きは、俗僧等が俗權財力の分配を争ひて種々の醜態を演ずるに過ぎずして、毫も宗門信仰の問題と關はる所がない。

○今日東本願寺の如き大宗門が滅亡することは、其の僧侶信徒、乃至關係者にとりて非常の打撃であるであらうが、日本の宗教の爲には寧ろ是の如き宗門の存在を不幸とすべきではあるまいか。迷信、偽善、奢侈、淫佚、墮落、腐敗、一切の惡徳の積聚とも見るべく、新時代の人心を傾倒せしむる譯には行かないのである。一日是の如き宗門の存在を長うせば、一日我が宗教の腐敗を甚しくするのみだ。我輩一個の考では、今の老法主君が益々健全で其の

法位に居り、ます／＼其の淫修を極め、ます／＼其の負債を殖やし、是の老賣女の如き宗門を一日も早く瓦解し了らむことを希望するものである。

(明治三十五年十月)

○今の時、文藝、學術、宗教、教育等の社會に、會と名のつくものが甚だ多い。曰く何々會、曰く何々協會、曰く何々研究會——もし各部面に涉つて仔細に算へるならば、恐らくは驚くべき多數を示すであらうと想はれる。實に今日は會の全盛時代である。少しく地位名聲ある人にして兩個三個の會員を兼ねないものは殆んど無いであらう。

凡そ會なるものの設立の趣旨は極めて尤もだ。團體結合の力によりて個人の力にて成し遂げ難き事業を成し遂げやうとする、趣旨や實に明瞭適切を極めて居る。然しながら我輩等の眼から今の所謂會なるものの實狀を見るに、其の多數のものは是の目的を達することの望みより頗る遠ざかつて居るのみならず、却て其の會員たる各個人の獨立心を消耗し、無責任の惡風を助長し、延いて着實誠意の氣習を滅殺しつゝあると云ふ極めて歎はしき事實を認むるのである。



○人々相依頼するは素より可。唯自家應分の責任を分たずして漫りに人によりて事むとするは、既に是れ碌々たる小人の根性である。今の所謂會なるものには概ね是の弊がある。是れは會其物に規律なく制裁なきの致す所でもあらうが、其の大なる病根は、會員たる個人各個が個人としての獨立心、責任感に缺乏して居るからである。個人の價値、尊嚴を自覺せざる人が幾人集らうとも決して有効なる團體の組織せらるべき謂れは無いのである。

○其の證據には、文藝學術等の社會に於て、如何なる大事業が今日の所謂會なるものによりて成し遂げられたる實例があるか。大いなる著述、もしくは發見をなしたるものは常に個人であるでは無いが。久しい以前より何々調査會と云ふ様なものは世間に随分あるが、其の所謂調査なるものの結果が世人を満足せしめた例しは果して一回だも有つたであらうか。其の任命せらるる委員の顔觸れなどは實に立派なものであるが、彼等は政府の與ふる長き歲月と厚き待遇とによりて、吾々を満足する様な報告を齎したことは一度も無いでは無いが。○凡そ如何なる事業に於ても、個人の精神の籠らぬものには決して眞の生命があり得るものでない。獨立心なく無責任なる多くの頭數ががやく集まつて釘補綴して拵へたものな

どは造り花や寄木細工の様なものだ。我輩は今日流行する會を惡むものである。彼等は多數の名の下に責任を没し、時間を徒費し、誠實を切賣りし、延いて一般個人的事業の上にも是の惡風を及ぼしつゝあるのである。

○序に云ふが、會頭又は總裁等の名の下に縁もゆかりも、能力も誠意も無い高位高爵の人などを戴くは、そもゝ何の必要があるのであるか。唯、是れ其の所屬會員の凡俗卑劣なる心情を暴露するの外に果して何の意味があるのであるか。

○先達來、女學生の醜聞と云ふことが殆ど社會の一つの呼聲となつて居るが、斯んな譯の分らぬ話はない。女學生として何も天人やエンジェルばかりではあるまいし、百人と千人と聚まつた中から十人や二十人の不品行者を出したからとて、尋常一様の世間並の出來事、何の不思議も無いのである。

○男子の學生を観るが好い。帝國最高の教育府たる帝國大學の學生中で、少くとも一割は花柳病に冒されて居ると云ふ事實は、果して何事を示して居るのであるか。社會は驚きもせ



ず、教育者は怪しみもせず、其の<sup>○</sup>状<sup>○</sup>恰<sup>○</sup>も<sup>○</sup>男<sup>○</sup>兒<sup>○</sup>には<sup>○</sup>不<sup>○</sup>品<sup>○</sup>行<sup>○</sup>を行<sup>○</sup>ふ<sup>○</sup>の<sup>○</sup>特<sup>○</sup>權<sup>○</sup>が<sup>○</sup>あ<sup>○</sup>る<sup>○</sup>こ<sup>○</sup>と<sup>○</sup>を<sup>○</sup>認<sup>○</sup>め<sup>○</sup>て<sup>○</sup>居<sup>○</sup>る<sup>○</sup>も<sup>○</sup>の<sup>○</sup>の<sup>○</sup>如<sup>○</sup>し<sup>○</sup>で<sup>○</sup>あ<sup>○</sup>る<sup>○</sup>。而<sup>○</sup>し<sup>○</sup>て<sup>○</sup>一<sup>○</sup>方<sup>○</sup>に<sup>○</sup>於<sup>○</sup>て<sup>○</sup>は<sup>○</sup>、百<sup>○</sup>中<sup>○</sup>一<sup>○</sup>人<sup>○</sup>の<sup>○</sup>不<sup>○</sup>品<sup>○</sup>行<sup>○</sup>あ<sup>○</sup>れ<sup>○</sup>ば<sup>○</sup>即<sup>○</sup>ち<sup>○</sup>直<sup>○</sup>ち<sup>○</sup>に<sup>○</sup>女<sup>○</sup>學<sup>○</sup>生<sup>○</sup>の<sup>○</sup>墮<sup>○</sup>落<sup>○</sup>呼<sup>○</sup>は<sup>○</sup>り<sup>○</sup>を<sup>○</sup>す<sup>○</sup>る<sup>○</sup>の<sup>○</sup>は<sup>○</sup>没<sup>○</sup>分<sup>○</sup>曉<sup>○</sup>の<sup>○</sup>極<sup>○</sup>み<sup>○</sup>と<sup>○</sup>言<sup>○</sup>は<sup>○</sup>な<sup>○</sup>け<sup>○</sup>れ<sup>○</sup>ば<sup>○</sup>な<sup>○</sup>ら<sup>○</sup>ぬ<sup>○</sup>。

○我輩が今の女子教育に嫌焉たらざるは、斯様な些々たる不品行の點に非ずして、寧ろ其の取締の嚴酷に失するの點にあるのである。例へば高等女子師範學校の例を見るが好い。學生は一步でも門外に出る時は必ず保證人の證印を要するのである。即ち何時分より何時何分までは某々の處に居つたと云ふ事實を認めて是れに一々保證人の證明を附せねばならぬのである。又例へば夏季休業で歸省すると云ふ様な場合には、學生の乗用に供する人力車夫は保證人の證明を持つて居るものに限るのである。一にも保證人、二にも保證人、學生の身體は場所に於ても時間に於ても殆ど凡ての自由を失つて居る、實に憐れな有様にあるのである。

○是の如く憐れなる處女より其あらゆる自由を取り去らねば女子教育は果して成し得られざるものであるか。學校當局者は其の學生を見るや殆ど前科者、兇狀持の如くである、一個婦人の人格の上に大侮辱を加へつゝあるのである。彼等は女學生各個に相當の自由を與へて

應分の責任を有たしむることを考へず、唯、外より是れを束縛して倅々として過ち無からむことを期するのみである。あゝ是の如き個人の獨立責任を没却して徒らに外より是れを壓迫するは果して二十世紀の教育法であるか。是れによりて所謂不品行を防遏することに於て多少の効能があるかも知れぬ。然しながら同時に卑屈、因循、姑息、無責任の惡氣習を是等女學生に吹き込むことの如何に大なるべきかを考ふれば、其の利害得失果して何れに在るか蓋し智者を待つて知るを要せざることであらう。

○要するに今日の女子教育者は勿論のこと、世上の批評家新聞記者などもイマ少し肝玉を大きくして貰ひたいものである。

○外國漫遊が吾人に新知識を與ふるや素より論は無い。唯、近時頻りに吾邦に見る所の如き無學無能なる老廢者の一輩が、志を國內に得ざる時、もしくは忘却せられむとする恐れある時には、則ち事に托して海外に遊び、半年一年にして歸り來れば、先に其の無學無識を笑ひたる世間では、所謂新歸朝者として盛んに彼れを歓迎し、其の人物の上に新しき價値でも生



じたかの如く、追従尊敬至らざる所無きが如きは頗る奇怪の現象と謂はなければならぬ。

○數月前、在倫敦の一友人が送り越した手紙の端に斯んな意味の文字があつたのである。

(前略) 此日、予は例の如く大英博物館の畫廊に於て半日を暮らしぬ。會、東洋某國の元老伯爵と稱する白髮の老人が、二の從者を隨へて予の坐せる椅子の前を通過せり。ああ君よ、少しく文藝に志ある吾等の如きものにとりて一日二日其の前に立ちつくすも飽くことを覚えざらむとする此の稀代の傑作の前をば、かの元老伯爵とやらむは傍目も振らす過ぎ去り給へる也。云々

○吾々は是の手紙に描かれた様な元老伯爵が我邦の元老中にあらうとは素より想はない。然しながら、彼等老朽者の多くが是の元老爵と相去ること甚だ遠からざる人物であることは、蓋し疑ふことの出来ぬ事實であらう。一枚の畫などは素より如何でも好い。唯、事一國の文藝に關はるものとしては、文明の觀察者にとりて極めて重大なる意義を有し來るのである。文明は法制や軍隊や財政や工業の上にも現はるるものでない、其の心髓は文藝、宗教、社會、學術等の公微に於て初めて認識し得らるのである。深大なる素養と同情とを要するは

欠



# 欠

煙霞を嗜む人  
斗擻を好む人  
紀行文を怡ぶ人  
人々の几上に薦む

坪谷水  
哉君著

東  
西  
南  
北

三六判洋布装幀頗清雅  
本文四百廿頁寫眞五十枚  
正價七拾錢 郵稅八錢  
博文館發行

名の如く東西南北の隅から隅まで、暇が有らうが有るまいが、頓着なしに全  
國中を飛び巡り、脚に任せて行き、筆に任せて書き、眞面目と滑稽を搞き交  
ぜ、得意も失敗も偽らずに告白したる著者が最近数年間の膝栗毛三十餘篇を  
集む。過る所の山川湖海、名所舊蹟も、人情風俗も、筆で足らざるは寫眞で  
補ひ、見る儘聞く儘、活動寫眞の如く紙上に現す。トホケた文態は讀んで肩  
が凝らず、三六版の製本は携へてポケットも膨れず。避暑に旅行に最好の友  
だ。

田山花  
袋君著  
日本一周

前編(東海) 三六判洋布装幀  
中編(中國九州四國) 正價每編  
後編(關東東山北海北陸) 送料十錢宛



コ-2091

日本  
中學  
校友  
會編  
纂

天台道士杉浦先生は一世の高士にして又一代の國士也、天下等しく其高風を欽せざる無し、先生本年四月を以て還曆の壽に達せらる、日本中學校友會は其の祝意を表せんが爲め、先生年來の著書を總括して記念出版と爲せるもの即ち此書なり、高士の面目に接し國士の精神を知らんとするの士、願はくば一本を座右にせられんことを。

# 天台道士著作集

天台道士 杉浦重剛先生還曆紀念出版

## 内容目次

鬼哭子 鬼笑子 鬼怒子 鬼夢物 日本教育原語 哲學論 倫理論 教育論 鬼哭年表 鬼哭年表 航英日記 梅窓錄

八

● 大判石版紙 六枚 ●  
● 總寫版 六百餘頁 ●  
● 製上布 十三頁 ●  
● 函入 六頁 ●  
● 正價 六圓拾錢 ●  
● 送料 二十錢 ●



45  
316



終